改新帝國讀本

巻九

375.9
Ha7
資料室

41558
教科書文庫
4
810
41-1930
2000301564

資料室
375.9
Ha 7

文部省檢定濟
昭和五年二月十四日 中學校國語科用

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年
文學士 長谷川福平 訂補

改新帝國讀本

東京 合資會社 冨山房發兌

東下り　尾形光琳筆

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
35762
文
論

改新帝國讀本　卷九目次

一　朗詠……一
二　明治維新改革の目的……德富蘇峰……五
三　神武天皇と後醍醐天皇……幸田露伴……八
　　新葉集の歌（自修文）……大町桂月……一三
四　新島守……（增鏡）……一七
五　東下り……（伊勢物語）……二八
六　東洋の詩興……夏目漱石……三一
七　藝術の神祕國……野口米次郎……三八
八　富嶽の詩神を懷ふ……北村透谷……四九

九　羽衣……（謠曲）……五四
羽衣の傳說（自修文）……六〇
一〇　御堂關白……（大鏡）……六五
一一　石彫獅子の賦……薄田泣菫……六八
一二　世界の四聖……高山林次郎……七三
一三　永遠の生命……亘理章三郎……八二
一四　みくにまなび……平田篤胤……八七
逆境の恩寵（自修文）……加藤玄智……九一
一五　千里が竹……近松門左衞門……九五
一六　東路の旅……（東關紀行）……一〇四
一七　月は世々の形見……室鳩巣……一〇九
一八　芳宜園大人の靈を祭る……村田春海……一一四

一九　秋色を觀じて人事に及ぶその一……三宅雪嶺……一一七
二〇　秋色を觀じて人事に及ぶその二……三宅雪嶺……一二四
二一　日本文學研究の新意義……藤村作……一三〇
二二　日本文學……一四一

廣島大學圖書之印

改新帝國讀本　卷九

一　朗詠

春興　　劉禹錫(一)

野草芳菲紅錦地。遊絲繚亂碧羅天。
もゝしきの大宮人は暇あれや　櫻かざしてけふもくらしつ

春夜　　白居易(二)

背燭共憐深夜月。踏花同惜少年春。
はるの夜の闇はあやなし梅の花　色こそ見えね香やはかくるゝ

(一)唐の詩人。

(二)唐の詩人。字は樂天。宣宗の大元年中に歿した。年七十五。

(三)平安朝時代の歌人。古今集撰者の一人。

(一)平安朝時代の文人。天慶二年(一五九九年)歿。
(二)平安時代の宮女。中務卿敦慶親王の女。
(三)唐の詩人。
(四)桓武天皇の皇子。承和元年(一四九四年)薨。
(五)歌人。天暦二年(一六〇八年)歿、年六十。

納涼

池冷水無三伏夏。松高風有一聲秋。　源英明

したくゞる水に秋のこそ通ふらし　中務

むすぶ泉の手さへすゞしき

杜鵑

一聲山鳥曙雲外。萬點水螢秋草中。　許渾

さつきやみおぼつかなきを杜鵑　明日香皇子

なくなる聲のいとど遥けき

ゆきやらで山路くらしつ杜鵑　源公忠

いま一聲のきかまほしさに

秋興

林間煖酒燒紅葉。石上題詩拂綠苔。　白居易

秋はなほ夕まぐれこそたゞならね

(一)天延二年(一六三四年)歿、年九十六。

あきかせにはつかりのねそきこゆなるたかたをかまつさをかけてきつらむ　友則

山腰歸雁斜帶水面新虹未展巾　在中

はるかすみたつを見すてゝゆくかりの花なきさとにすみやならへる　せい

(二)平安時代の文人。菅原道眞の門人。延喜十二年(一五七二年)歿。
(三)文人。永觀元年(一六四三年)歿、年七十三。

をぎの上風

はぎの下露　(一)藤原義孝

八月十五夜

三五夜中新月色。二千里外故人心。　白居易

十二廻中無勝ㇾ於此夕之好。

千萬里外皆爭ㇾ於吾家之光。　(二)紀長谷雄

水の面にてる月なみを數ふれば

こよひぞ秋のもなかなりける　(三)源順

(一)歌人。古今集撰者の一人。延喜五年歿、年六十一。

(二)儒者。能書家。村上天皇に仕へた。天徳元年(一六一七)歿、年七十二。

(三)儒者。冷泉天皇に仕へた。

(四)平安時代の文人。長徳三年(一六五七年)歿。

雪

雪似鷺毛飛散亂。　人被鶴氅立徘徊。　白居易

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにける　いづれを梅とわきて折らまし　紀友則

餞別

前途程遠馳思於雁山之暮雲。　大江朝綱

後會期遥霑纓於鴻臚之曉淚。

おもひやる心ばかりはさはらじを　なに隔つらん峰のしら雲　橘直幹

祝

嘉辰令月歡無極。　萬歳千秋樂未央。　源英明

長生殿裏春秋富。　不老門前日月遲。　慶滋保胤

君が代は千代にやちよにさゞれ石の　いはほとなりて苔のむすまで　よみ人しらず

(一)史學者。思想評論家。名は猪一郎。文久三年肥後國に生まれた。國民叢書、靜思餘錄、蘇峰文選、吉田松陰、近世日本國民史等の著がある。

國是

二　明治維新改革の目的

(一)徳富蘇峰

明治維新の大改革は日本帝國の自覺であつた。大和民族の自醒であつた。維新大改革は決して封建制度の廢止や將軍政治の顚覆を目的としたものではなかつた。封建制度の廢止や將軍政治の顚覆は、單に帝國が自覺してその時務に順應するのに際して、必然の結果として生じた出來事に過ぎぬのである。

然らば則ち維新大改革の目的は何であつたか。概括的にこれを擧げれば、(一)建國以來の國是である一君萬民の本體に立返ること、(二)擧國一致の力を以て世界列國と對立すること、(三)國力を增進して帝國の天職を遂行すること、この三大綱であつたのである。

維新大改革に際して、或者は建武中興の古に則らうと主張した

聖造
六合

が、「それは規模が狹小であるから、よろしく神武創業の古に復すべきである。」とは、當時に於ける達人の意見であつた。誠にその通りである。當時或は王政維新といひ、或は王政復古といつたが、しかもそれは異字同義で、復古は卽ち維新であり、維新は卽ち復古であるのである。神武創業の古に復ることは王政の維れ新たな所以である。固より古に復るとはその形式についていふのではなく、その精神についていふのである。然らば神武創業の精神は如何なるものであるか。

「ソレ大人制ヲ立ツル、義必ス時ニ從フ。苟モ民ニ利アラハ、何ソ聖造ニ妨ハン。且ツ當ニ山林ヲ披キ拂ヒ、宮室ヲ經營シテ、而シテ恭シク寶位ニ臨ミ、以テ元々ヲ鎭ムヘシ。上ハ卽チ乾靈國ヲ授クル德ニ答ヘ、下ハ卽チ皇孫正ヲ養フ心ヲ弘ム。而シテ後、六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ウテ而シテ宇ト爲ス、亦可ナラスヤ。」

玄功
黎元
皇猷
紹述

これは神武天皇が東征後六年に橿原宮を建て給うた時の令の一節である。そして、この意義を更に異なつた文字で說明したものは、(一)崇神天皇が群臣に下し給うた詔である。

「惟フニ、我カ皇祖、諸天皇等ノ宸極ニ光臨スル者、豈ニ一身ノ爲ナランヤ。蓋シ人神ヲ司牧シ、天下ヲ經綸スル所以ナリ。故ニ能ク世ニ玄功ヲ闡キ、時ニ至德ヲ流ス。今朕大運ヲ奉承シ、黎元ヲ愛育ス。如何カ當ニ聿ニ皇祖ノ跡ヲ遵ヒ、永ク無窮ノ祚ヲ保ツヘキ。ソレ群卿百僚、爾ノ忠貞ヲ竭シ、共ニ天下ヲ安ンスル、亦可ナラスヤ。」

この如く上代の規模は宏大であつた。卽ち萬民を提げて、四海に臨むのにあつた。この皇猷を紹述することが明治維新の目的であつた。要するに、吾人が前に列記した三大綱は、悉くこの令と詔との中に包含されてゐる。天皇と人民との中間に介在する將軍政治を止めたのも、日本の擧國的統一を妨げる封建制度を廢したのも、その

(一)第十代。

他門閥の特例を去り、公家大名士族の特權を罷め、事實に於て階級制度を除いて萬民平等の政を行ふやうになつたのも、一として我が國史の本源に遡つてその精神に則らぬものはなかつた。これ王政復古の王政維新である所以で、王政維新の王政復古である所以である。明治維新は決して武家政治に代へるのに公家政治を以てするのではなかつた。明治維新は實に大和民族が帝國的に自覺した日本歴史の分水嶺ともいふべき新時代の開始であつたのである。

——國民小訓——

(一)小説家。文學博士。名は成行。慶應三年東京に生まれた。五重塔、風流佛、洗心廣錄等の著がある。

(二)直越(たごこえ)ともいふ。大阪府中河内郡から生駒山を越えて大和國生駒郡生駒村に至る坂路。

憤懣

三　神武天皇と後醍醐天皇

幸田露伴(一)

申すもいと畏けれど、我が國創業の帝神武天皇、孔舍衙(くさか)坂の戰に御兄君五瀬命を敵の矢の爲に失ひ給ひて、甚しく御憤懣(もん)あらせられ、誓つて長髓彦(一)に天誅を加へんとし給ひし御時は、如何に勇猛壯烈に大御心の思し給ひしがまゝを、御製に述べ給ひしぞや。

みつみつし　久米の子等が　粟生には、かみら一もと、
そねがもと、　そねめつなぎて、　擊ちてし、やまん。

と謠ひ給ひ、また

みつみつし　來目の子等が　垣本に、　植ゑしはじかみ
口ひゞく。　我はわすれじ、　擊ちてしやまん。

と謠ひ給へる御威勢の激しき、御心の猛々しき、薑を食へば餘味ここにありて、我が口ここに疼(いた)む。我が兄既に擊たれぬ。我が心なほ痛む。忘れんや。忘れんや。おのれ醜虜、擊ち屠らではいかでか止まん。」と、御目に觸れし薑に御情を寄せ給ひて、御言葉のあやをなし出で給へる、いさぎよしなんど申すも畏き御製なり。

建武中興の帝後醍醐天皇は、これはた申すも畏けれど、英明にわ

(一)奈良縣鳥見の酋長。一名登美毘古。

たらせ給ひし御門なり。されどその御製の御心御姿は、世の異なるが爲もあるべけれど、いたく神武天皇のとはさま異なり。

秋ごとのならひと
思ひし露しぐれことしは
袖の上にぞありける

と詠じ給へる、

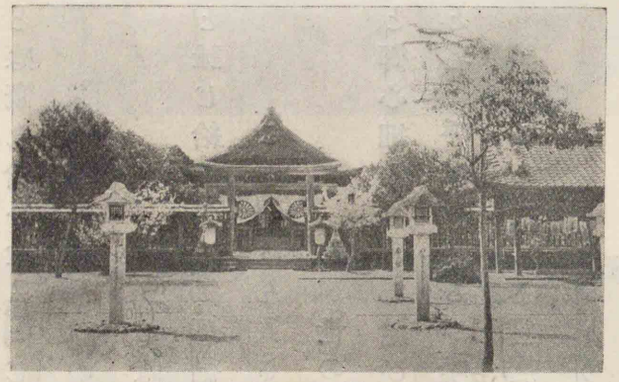
まだなれぬ板屋の
軒のむら時雨おとを聞
くにもぬるゝ袖かな

とあそばされたる、臣子の分としては、我が日の本の皇帝のかゝる御詠ありしかと思へば、恐ながら御痛はしさに涙はふり落ち、かゝる御詠の

神武天皇御陵

ありたるその世いと恨めしく口惜し。

うづもるゝ身をば歎かずなべて世の
くもるぞつらきけさのはつ雪



吉野神宮

の御製は、大御心の深く廣き、おろかなる身にも大凡は推量り奉られて、これまた涙とゞめあへず。

身にかへて思ふとだにも知らせばや
たみのこゝろのをさめがたさを

の御製は、聖意いと畏く、恐多き極みの御詠なり。

いかに寢し夜の夢にかあるらん
もの思はで過ぎぬる方の年月は

と懷舊の情を詠み給ひたる、吉野の行宮にていかなるをりにか、

あだに散る花をおもひの種として
この世にとめぬこゝろなりけり

と感慨し給ひたる、同じ行宮にて御風邪めしたる時、

つゆの身を草の枕におきながら
風にはよもと頼むはかなさ

と詠じ給ひたる、御扈從の人々うち續き身まかりける時、

こと問はん人さへ稀になりにけり
わが世の末のほどぞ知らるゝ

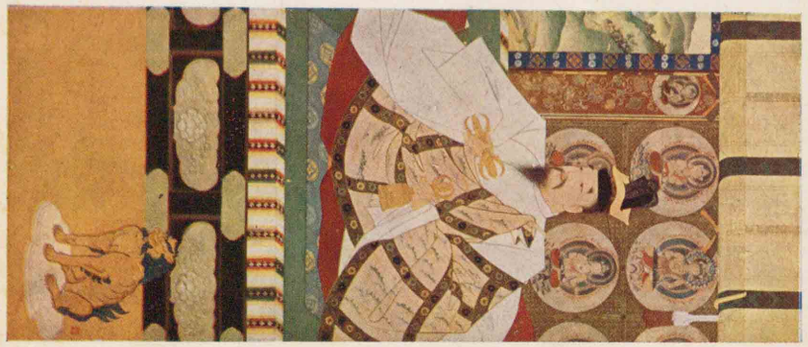
と御心細くものし給ひたる、吉野にて(一)世尊寺のあたりの雲居の櫻と名に呼ばれたるが咲きたるを御覽じて、

ここにても雲居の櫻咲きにけり
たゞかりそめの宿とおもふに

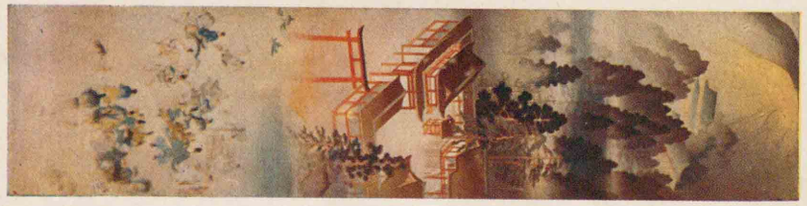
と無限の御恨を、いと、優しくいひ出で給ひたる、同じ行宮にて、

扈從

(一)奈良縣吉野郡大淀町比曾村。



後醍醐天皇



伊藤龍涯筆

ふしわびぬ霜寒き夜の床はあれて
袖にはげしき山おろしのかぜ

と詠じ給ひたる、その他船上山にて名和長年に賜ひたる

忘れめやよるべも波のあら磯を
み船のうへにとめしこゝろは

の御詠の如き、なべて一天萬乘の御製とし思へば、臣子の分としては、涙なくては拜誦しまゐらせ難き御製多し。

——調言——

自修文

新葉集の歌

大町桂月

後醍醐天皇の皇子宗良親王、歌に堪能なり。將軍として戰ふ際にも吟詠を廢し給はず。元弘以來弘和元年までの名歌を撰びて、「新葉和歌集」と題しけるに、長慶天皇これを勅撰に準じ給へり。新葉集はかゝる次第にて出來たれば、隨つて吉野山に關する哀なる歌も少からざるなり。

(一)鳥取縣東伯郡赤崎の南三里。

(二)姓は源氏。初の名は長高。伯耆國名和の人。

(三)文學者。名は芳衛。高知縣の人。大正十四年歿。年五十七。花紅葉、黃菊白菊、日本文明史等の著がある。

(四)後醍醐天皇の第八皇子。初め出家して尊澄といひ、天台の座主であつた。還俗して宗良と改め、中務卿征東將軍として朝敵征討の軍に從はれた。

(五)第九十八代。元弘元年から長慶天皇の弘和元年まで五十一年間。後醍醐天皇の元弘元年から

ここにても雲居の櫻咲きにけり
たゞかりそめの宿とおもふに

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に「雲居の櫻」と稱する櫻あり。雲居は禁中をいふ。さらでだに舊禁中のこひしくして堪へ給はざるに、吉野山中「雲居」と稱する櫻を御覽じては、豈叡感無量ならざるを得んや。悲しいかな、かりそめの御やどりつひの御やどりとなりて、(一)延元陵畔、永へに游人をして涙襟を潤ほさしむ。

吉野山花も時得て咲きにけり
みやこのつとに今やかざらん

これ(二)後村上天皇の御製なり。山櫻を土産にして京都に還らせ給ひし時の御嬉しさはさぞと思はるれど、やがてまた京都を保ち給ふこと能はずして、再び吉野に赴かせ給ひし時の御失望やいかなりけん。

わが宿と頼まずながら吉野山
花に馴れぬる春もいくとせ

(六)醍醐天皇が勅して古今和歌集を撰ぜしめられてから新續古今集まで勅撰和歌集はすべて二十一ある。

つひの御やどり　最後の御宿。

(一)後醍醐天皇の御陵のあるところ。吉野山の藏王堂のほとり。

游人　旅人。

つと　藁などで包んだもの。土産物。

(二)第九十七代。

花に二云々　花となじみになつた春はどれほどであらうか。もはや長い間ここに春を迎へた。

これ長慶天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひけん。父祖の御遺志を嗣ぎ給はんの御志切なれども、事遂に御志とかなはざりき。されど知らず、京都は果して御心にかなひたる御宿なりしか。この天皇の御母を(一)嘉喜門院と申しまつる。その歌に、

櫻花さきて疾く散る習こそ
わが身の春のもの思なれ

きのふは紅顔、けふは白頭、人生の老いやすきは、男子とても悲歎に堪へざるに、まして女性の御身、櫻花の散りやすきさまを見給ひて、如何に御身をはかなく思し給ひけん。

故里はこひしくとてもみ吉野の
はなの盛をいかが見すてん

これ新葉集の撰者なる宗良親王の歌なり。詩人の雅懐を見る。されど散らばまた如何に都のこひしかるらん。

嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給へり。されど後村

(一)後村上天皇の女御。

雅懐　風流な心持。

上天皇崩御の後は、悲哀に堪へず、誓つて琵琶を彈き給はざりき。然るに天授三年七月七日、吉野の行宮にて樂を張り給ひけるが、樂終りて後、長慶天皇、門院に向かひて、一曲をと切に乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、琵琶を彈き給ふ。その時の(一)御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの
秋おもほゆる峰のまつかぜ

昔は父天皇この琵琶を聽きて、御心を慰め給ひけん。父天皇今はおはせず、母君の琵琶が亡き父天皇の形見なり。門院の御返しに

あはれとも君ぞ聽きける今ははや
ふきたえぬべき峰のまつかぜ

「わが餘命いくばくもなし。君が昔をしのぶといふ琵琶の音も、やがて聽き給ふに由なかるべし。」となり。二首いづれも意あはれにして、詞も妙なり。宗良親王これを評して、古の勅撰集中の唱和に比して、毫も遜色なしとて、(三)これを新葉集に收め給へり。

——作文五十講——

(一)長慶天皇の御歌。
そのかみ　その當時の意。ここでは後村上天皇御在世中のこと。峰の松風に往時を思ひだされたのである。
御返し　御返歌のこと。普通歌には返しといひ、文には返りといふ。
(二)長慶天皇。
ふきたえぬべき　吹絶えてしまひさうな。
唱和　互に詩や歌で問答すること。
遜色　見劣りしたおもむき。
(三)作文の作り方を五十項目に分けて述べたもの。大正五年東京中外社出版部發行。

四　新島守

四月二十日(一)帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに讓り申させ給ふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、(四)御兄の院をば中の院と申し、(五)父帝をば本院とぞ聞えさする。このほどは(六)家實の大臣關白にておはしつれど、御讓位の時道(七)家の大臣(おとど)攝政になり給ふ。かの東(八)の若君の御父なり。さても(九)院の思し構ふること、忍ぶとすれどやうやう漏れきこえて、(一〇)ひがしざまにもその心遣すべかめり。東の(一一)代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつがつ彼を御勘事の由仰せられば、御方にまゐるつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しける。

(一)承久三年（一八八一年）。
(二)順德天皇。
(三)仲恭天皇。
受禪
(四)土御門院。
(五)後鳥羽院。
(六)近衛基通の子。
(七)後京極良經の子。
(八)當時の將軍賴經。鎌倉にゐた。
(九)後鳥羽院。
(一〇)鎌倉幕府方。
(一一)佐藤朝光の子。承久三年歿。
かつがつ　御勘事

(一)北條義時。
(二)北條時房。
(三)義時の子。

たなびかす

横さまの死

東にもいみじうあわて騒ぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻來りなん時に、はかなきさまにて屍を暴さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつは(一)我が身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と(二)泰時といふ(三)一男と二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて、都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都に參らするは、思ふところ多し。本意の如く清き死をすべし。人にうしろ見えなんには、親の顔また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横さまの

後鳥羽天皇

死をせんことはある、べからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、再びこの足柄、箱根山は越ゆべし。など、泣く泣くいひきかす。まことにしかなり。また親の顔拜まんこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今や限りと哀に心細げなり。

かくてうち出でぬるまたの日、思ひかけぬほどに、泰時たゞ一人鞭をあげて馳來たり。父胸うち騒ぎて、「いかに。」と問ふに、「軍のあるべきやう大方の掟などは、仰の如くその心を得はべりぬ。若し道のほとりにも、はからざるに忝く鳳輦を先立てて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることもはべらんにまゐりあへらば、その時の進退いかがはべるべからん。この一ことを尋ね申さんとて、一人馳歸りはべりき。」といふ。義時とばかりうち案じて、「賢くも問へるをのこかな。そのことなり。正に君の御輿に向かひて弓を引くことはいかがあらん。さばかりの時は冑を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまり

とばかり

かしこまりを申す

を申して、身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましながら、軍兵を賜はせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戰ふべし。」といひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつることなれば、もののふども召集へ、宇治、勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大將一人のみなん、御うまごのこともさることにて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならず東を重く思して、さしいらへもせず、院の御心の輕きこととあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎつぎ數多聞ゆれど、さのみは記し難し。いくさにまじり立つ人々、この外の上達部にも殿上人にも數多ありき。

(一)藤原氏。西園寺家の祖。
(二)將軍頼經のこと。頼經は公經の女の出である。
(三)藤原通重の子。建久九年(一八五八年)生、年五十一。
(四)頼朝をいふ。
(五)藤原殖子。後鳥羽院の御母。
(六)藤原重子。順德院の御母。文永元年(一九二四年)歿、御年八十八。
上達部　すべる

中の院はあかで位をすべり給ひしより、言にいでてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御騷にも、殊にまじらひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍のことなども、おきて仰せられたり。

いつの年よりも五月雨晴間なくて、富士川、天龍などえもいはず漲り騷ぎていかなる龍馬もうち渡し難ければ、攻上る武者どもも、怪しく惱めり。かゝれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治、勢多へ分ち遣す。世の中ひびき罵るさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へにげ籠り、遠き世界に落下りすべて安げなく騷ぎ滿ちたり。いかがあらんと君も御心亂れて、思し惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたゞしく色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月十日餘りにや、いくばくの戰だになくて、遂に身方
龍馬

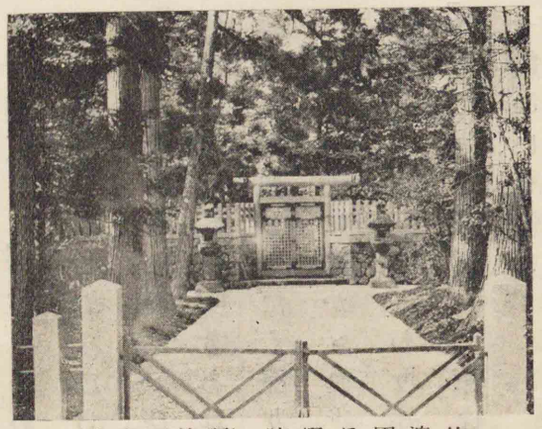
の軍破れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれ上下たゞものにぞ當り惑ふ。東よりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍謀らひおきてつつ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮宮とところどころに思し惑ふことさらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車の怪しげなるにて、七月六日入らせ給ふ。けふを限りの御ありき、あさましう哀なり。(一)ものにもがなや。」と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年よそぢに一つ二つや餘らせ給ふらん、まだいと惜しかるべき御ほどなり。(二)信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條の院へ奉らせ給はんとなり。かくて同じき十三日に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身とも思されず、いみじういかなりける代々の報にかと恨めし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことけふを限りの御ありき

(一)「とりかへすものにもがな世の中を、ありしながらの我が身と思はん。」(源氏物語河海抄)

(二)藤原信實。有名な畫家。文永二年(一九二五年)歿、年七十。

や七月九日帝をもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にてお(一)り給へる例も、これや始なるらん。唐土にぞ四十五日とかや位におはする例ありける。」とぞ、唐の文讀みし人のいひし心地する。それもかやうの亂やありけん。さて上達部、殿上人、それより下、はた殘りなくこのことに觸れにしたぐひは、重く輕く罪に當るさま、いみじげなり。

中の院は初より知ろしめさぬことなれば、東にも咎め申さねど、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にあらんこと、いと恐ありと思されて、御心もてその年閏十月十日、土佐國の幡多(二)といふ所にわた



佐渡國眞野陵（順德天皇陵）

(一)秦の第三世子嬰のこと。始皇の孫。在位四十六日で沛公に降り秦は滅びた。

御心もて

(二)高知縣の西南幡多郡。

(一)後嵯峨天皇。
(二)土御門天皇の御母在子。
(三)源通子。

召次

わりなきこと

(四)同年閏十月。

うたて

らせ給ひぬ。去年のきさらぎばかりにや、若宮いでき給へり。承明門院の御せうとに通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風吹きあれ、吹雪して、來し方行く先も見えず、いと堪難きに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

憂世にはかゝれとてこそうまれけめ
ことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近きほどに。」と東より奏したりければ、後には阿波國に遷らせ給ひにき。

さてもこのたび世の有様、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは「父の王を失ふ例だに一萬八千人までありけり。」とこそ佛も說

(一)藤原純友。朱雀天皇の天慶四年(一六〇一年)誅せられた。
(二)源義親。義家の第二子。鳥羽天皇の天仁元年(一七六八年)誅せられた。
(三)後白河法皇。
(四)二條天皇。

よせ

きざみ

むげの民

き給ひためれ。まして世下りて後、唐土にも日の本にも、國を爭ひて戰をなすこと數へつくすべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけん。若しはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの、少しのたがひめに、世は隔りて、その恨の末などより事起るなりけり。今のやうにむげの民と爭ひて君の滅び給へる例、この國にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に崇德院の世の亂り給ひしだに故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、天照大御神も御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の帝を守り給はすることは强きなめり。」とぞ、古き人々も聞えし。また信賴の衞門督おほけなく二條院を脅し奉りしも、遂に空しき屍をぞ道のほとりに棄てられける。かゝれば舊りにしことを思ふにも、なほさりともいかでか三皇、今上數多在します王城の徒に亡ぶるやうやは

あやなき業

(一)後鳥羽院。

百の官

(二)「津の國のこやとも人をいふべきに、蘆こそなけれ葦の八重ぶき。」(後拾遺集、和泉式部)

霞の洞

あらんと、たのもしくこそ覺えしに、かくいとあやなき業の出できぬるは、この世一つのことにもあらざらめども、迷の愚かなるまへには、なほいと怪しかりし。

六つにて位に即かせ給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じことなりしかば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして、萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を從へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有樣にて、遠きを憐び近きを撫で給ふ御惠、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政を聞し召すにも、難波の葦の亂れざらんことを思しき。藐姑射の山の峰の松も、やうやう枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても、空ゆく月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立別

けしきばかりことそぎたり柴の庵のしばし

(一)「いづくにもすまれすばただすまますあらん、柴の庵のしばしなる世に。」(新古今集、西行法師)

ゆゑづく

(二)和漢朗詠集白樂天の詩句、「三五夜中新月色。二千里外故人心。」

れ、己がちりぢりにさすらへ、磯の苫屋に軒を並べて、自らこと問ふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、我が故郷のしるべかとばかり詠め過させ給ふ。御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべしまいていつをはてとか廻りあふべき限りだになく、雲の浪、煙の浪の幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。

このおはします所は、人離れ、里遠き島の中なり。海面よりは少し引入りて、山蔭に片そへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊などは、しきばかりことそぎたり。誠に柴の庵のたゞずまひとかりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも夢のやうになん。遙々と見やらるゝ海の眺望、二千里の外も殘り

なき心地する、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きくるを聞し召して、

われこそは新島守よおきの海の
あらき波かぜこゝろして吹け
おなじ世にまたすみの江の月や見ん
けふこそよそに沖のしまもり

――増鏡――

こちたし

五　東下り

昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき國もとめにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋(一)といふ所に至りぬ。そこを八橋といふことは、水のくも手に

(一)碧海郡。知立町の東。

流れわかれて、木八つ渡せるによりてなん八橋とはいひける。その澤のほとりの木蔭におりゐて飯(めし)くひけり。その澤に燕子花いとおもしろく咲きたり。それを見て或人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心を詠め。」といひければ、詠める、

唐衣きつゝ馴れにしつま
しあれば
はるばる來ぬる
旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、飯の上に涙落してほとびにけり。行き行きて駿河國に至りぬ。宇津(一)の山に至りて、我が入らんとする道は、いと暗う細きに、蔦かづらは茂りて、もの心細くすゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あ

八橋（尾形光琳筆）

飯

唐衣

(一)安倍郡と志太郡との境。

ひたり。かゝる道にはいかでかおはする。」といふに見れば、見し人なりけり。京にその人の御許にとて、文書きてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも
ゆめにも人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか
かのこまだらに雪の降るらん

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは鹽尻のやうになんありける。なほ行き行きて、武藏國と下總國とのなかに、いと大きなる河あり、それを角田河といふ。その河のほとりに群れゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわび

鹽尻

在原業平（不退寺藏）

あへるに、渡守「はや舟に乘れ。日も暮れなん。」といふに、乘りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鴫の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これなん都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

と詠みければ、舟こぞりて泣きにけり。

——伊勢物語——

六　東洋の詩興

夏目漱石(一)

山路を登りながらかう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

(一)小説家。名は金之助。東京の人。大正五年歿、年五十。吾輩は猫である。虞美人草。草枕。明暗。漾虛集。文學評論等の著がある。

鏗鏘の音
靈臺
(Camera.
澆季溷濁の俗界

住みにくさが高ずると、心安い所へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれ、畫が出來る。

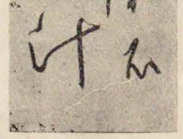
越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人といふ天職が出來、ここに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い。

住みにくい世から住みにくい煩を引拔いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である。或は音樂、彫刻である。細かにいへば、寫さないでも、たゞまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架に向かつて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。たゞおのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラ(一)に澆季溷濁の俗界を清く麗かに收め得れば足りる。この故に無聲の詩人には一句なく、

尺縑
何食はぬ和尚の顔や河豚汁　漱石

無色の畫家には尺縑なくとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の籠兒よりも幸福である。

忽ち足の下で雲雀の聲がしだした。谷を見おろしたが、どこで鳴いてゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせとせはしく絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて、ゐたたまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、また鳴きくらさなければ氣が濟まぬと見える。その上どこまでも登つて行く。い


夏目漱石筆蹟

山路（狩野光雅筆）その一

つまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登りつめた擧句は、流れて雲山に入つて漂うてゐる中に、形は消えてなくなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない。魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたものの中で、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思

(一) Percy Bysshe Shelley. イギリスの詩人。(西暦一七九二年—一八二二年)

(二) 雲雀に寄する賦。(Ode to the Skylark.)

山路（狩野光雅筆）その二

つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ち(一)シェリーの(二)雲雀の詩を思ひ出して、口の中で覺えたところだけ諳誦して見たが、覺えてゐるところは二三句しかなかつた。

前を見ては、しりへを見ては、もの欲しとあこがるゝかな、われ。腹からの笑といへど、苦みのそこにあるべし。うつくしき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとぞ知る。

なるほど、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひきつて、前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふわけにはゆくまい。

西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂はつ

きものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて、胸が躍るばかりだ。かう山の中に來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦みも起らぬ。

料簡

苦みのないのは何故であらう。たゞこの景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面をもらつて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。たゞこの腹の足しにもならぬ景色が、景色としてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も心配も伴なはぬのであらう。自然の力はここに於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

陶冶

醇乎として醇

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりするのは、人の世につきものだ。余の欲する詩は、そんな世間的な人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、少時でも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小說は少からう。どこまでも世間を出ることの出來ぬのがその特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なものも、この境を解脫することを知らぬ。嬉しいことに、東洋の詩歌には、そこを解脫したものがある。

解脫

採菊東籬下。(一)　悠然見南山。

(一)陶淵明の詩。陶淵明集卷三の飲酒二十首中の第五。

たゞこれぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

出世間的

獨坐幽篁裏。(二)　彈琴復長嘯。

(二)唐の詩人王維の詩。

深林人不知。　明月來相照。

別乾坤

たゞ二十字の中に、優に別乾坤を建立してゐるのである。

——草枕——

七　藝術の神祕國

野口米次郎(一)

(一)詩人。明治八年愛知縣に生まれた。多くの英詩集の外、表象抒情詩。野口米次郎プクレット等の著がある。

外人が私の宅へ來て、何か日本獨得のものが見たいといふ時、私はいつも茶席へ案内する。私は彼を飛石で路のついてゐる所謂露路に立たせる。そして、「ここは外面的世界を捨てて自己遍照に入る通路だ。」と説明する。私は彼に茶席を取卷く小さい庭を眺めさせ、幾百年の星霜を經て灰色になつてゐる老樹を指さしていふ、「君はここに沈默の祝福のあることを感じねばならない。我々東洋人はすべての詩の最高潮を寂寞の中に發見するのだ、寂寞の幽かな光に導かれて審美の恍惚に入るのだ。君はそれを理想の聖殿といつてもいい。また唯美の悦樂境といつてもいい。その名前はどうでもいい。……ここは孤獨に生きる無邊の住む所だ。眞實の個人主義を發見して、さうして宇宙の靈に合する所だ。」私は、その外人に、古びた花

自己遍照

唯美

崗石の燈籠が、聖人か哲學者か詩人かでもあるかのやうに蹲つてゐる姿に注意させていふ、「この燈籠の心の中には、眞理を照らす所謂燈臺の灯がある。この光は人がどうして社會の狂瀾怒濤を忘れるかを教へるであらう、どうして人生の廢墟と塵埃とから脱するかを教へるであらう、どうして茶道に入るかを教へるであらう。」私は、彼に、茶席の床が地面に接近して低く作られてゐて、我々が自然を足元から眺めて敬禮することが出來るやうになつてゐると語り、茶席の庇が低く作られてゐて、そこの小暗い空氣は思想や想像を一點に集中させるのに便であるといふ。

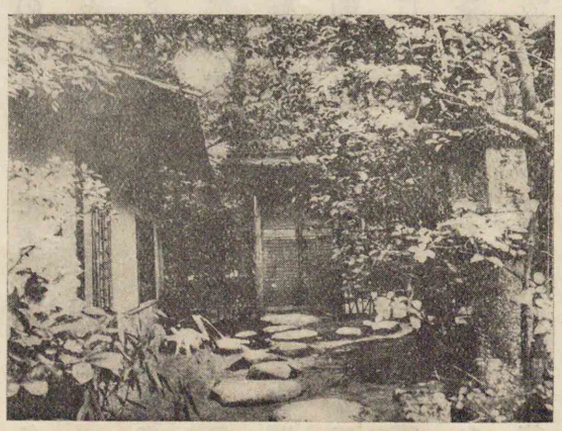
それから、私は彼を茶席に入らせて、氣味の悪いぐらゐ冷たい疊の上に坐らせ、さうして眼を閉ぢて默想せよと强ひる。彼は私の言ふが儘にする。私は、彼に、「どうだね、默想の神祕は君に清淨界を與へたか。君の靈は無礙自在を得たか。我々がここで創造しようとする

無礙自在

甘やかな靜かな恍惚境に對して、「君は何と思ふか。」といふと、彼は漠然たる微笑を洩らすだけで、一言も發することが出來ない。東洋、否、日本の審美觀を十分に理解することの出來る感情の所有者でない限りは、大概の外人は私の言葉を了解することが出來ない。了解することが出來ないのも無理はない。なぜならば、この茶席卽ち茶道で暗示される日本の審美主義は、日本の古文化が極點まで發達したもので、自然と人生とを融和させて、それを單純化させた日本人の態度は、彼等外人がこれまで夢にも見なかつたところのものであらう。然し、私に外人が日本で一番特色のあるものは何であるかと尋ねたならば、私は直ちに茶席を擧げる。否、茶席を背景とした日本人の審美的態度そのものを擧げるであらうと信ずる。

私はここで私が曾て書物で讀んだことのある一つの物語を話したい。將軍秀次が朝の茶に三四人の茶人を招いたことがあつた。

招かれた茶人は當代の名家であつたことはいふまでもない。季節は四月、日は二十日で、櫻もまだ散るか散らないといふ頃で、春の氣分も段々老いて來た時分であつた。朝の催であつたから、東風は茶席の軒端の露を拂ひ、庭の樹木には朝の光を恐れて夜の靈が蹲つてゐるやうに思はれた。茶席の中には燈火が照らされず、靜寂が茶席の全部を占領して居つた。耳を欹てると、茶釜から銀鈴のやうな響が出てくる。それは湯のたぎる音で、このもの古い音律だけが茶席の寂寞を破る特權をもつてゐるやうに思はれた。招かれた客人は誰も無言で、主人役の秀次の出席を今や遲しと待つてゐた。ところで、主人



茶室

はなかなか出て來ず、客人どもは欠伸をかみしめてゐると、突如として有明の月がすつと忍び込んで來て、その微かに冴えた曙近い月の影が落ちてゆく所を見送ると、床の間に懸けてある小さな色紙の上に落ちてばつたりと止まつた。その色紙には、定家[一]の能筆で、「ほとゝぎす鳴きつる方を眺むれば、たゞ有明の月ぞ殘れる。」[二]の歌が書いてあつた。招かれた茶人どもは、はたと膝を打つて、「はゝあ、この茶筵はこの色紙を見せる爲の催だな。有明をあてこんで、『たゞ有明の月ぞ殘れる。』の歌の色紙とは、將軍の御趣味のほど感歎の至りである。」と心の中で叫んだ。話はたゞこれだけで、その後主人役の將軍は出席したか、またどういふ風にこの茶會が終つたかはわからない。然し、そんなことはどうでもいい。話の要點は、秀次の唯美的な態度に繫がつてゐる。實に彼の態度は精細な詩の祕術に觸れたものである。この特殊な審美的雰圍氣を誘致し得た藝術的態度は驚歎

(一) 歌人。藤原定家。新古今、新勅撰集の撰者。仁治二年（一九〇一年）歿、年八十。

(二) 右大臣藤原實定の歌。千載集夏歌の部にある。

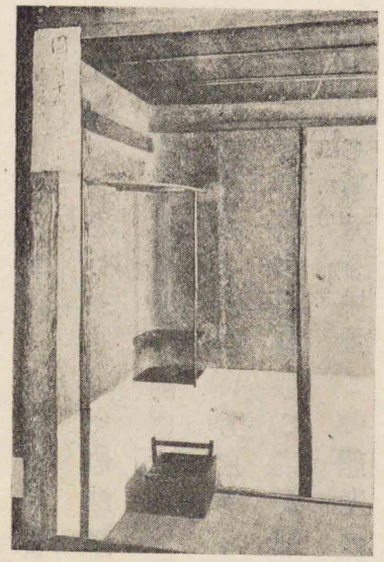
に値する。洗錬し盡くされた文化の酵母から生まれた詩的行爲とはこのことであらう。詩歌、繪畫の藝術品を紹介する方法として、私は他の何處にこれ以上に優美なものがあらうとは思はない。また繪畫や詩歌を鑑賞する方法として、偶然にこの招かれた茶人どもが發見したこと以上に幽雅なものがあらうとは思はない。私はこの態度こそ諸外國に誇ることが出來ると信ずる。西洋は質より量に走る、また複雜の果は混亂に落ちる。西洋は如何に自然を調節配列するかを知らない國である。西洋は如何に人生を整理するかを知らない國である。日本は西洋に如何に自然と人生とを選擇し單純化するかを教へねばならない。茶席の生活を重要視した昔の文化は、沈默と孤獨との德を教へた。量より質を重大視して、小の中に大を發見する方法を教へた。あらゆる人生の完成は自己整理から始まらねばならないことを教へた。そして、茶席こそこれが具體化

したものに外ならない。故に、私は外人を茶席に案内して、それが日本の創造した文化の一大景觀であると說くのである。

私は茶席の作法について學んだことはない。私は外人をそこへ案内するとしても、決して細かい作法を說く資格をもつてゐない。然し、私は茶席の藝術が放散する雰圍氣に觸れて、人生を外面的世界から解脫して、無礙自在な永劫を掴むことが出來るやうな氣がする。言換へると、私も生死一如の境地が茶席で發見されるやうな氣がする。西洋人でも詩の理解にすぐれた人ならば、この境地に入ることが出來ると思ふ。茶席は日本特殊の創造であるけれども、確かに世界的價値のある理由もそこにある。よしんば、今日の西洋人が日本の茶席藝術を理解しないとしても、明日の西洋人の理解がそこへ及ばないとは限らない。私は茶席藝術を高唱して日本の審美を說くものである。

(一)茶人。千家流の祖。和泉國の人。天正十九年(一五九一)歿、年七十一。

私は更にもう一つの挿話を語りたい。話は宗匠(一)利休と太閤秀吉に關して、前者が後者を「朝顏の茶」に招待した事實である。利休の時代には、朝顏は至つて珍しいものであつた。話によると、利休の庭には朝顏の花が澤山植ゑてあつたやうに思はねばならないが、太閤がくると定まつた當日になつて、利休は庭の朝顏全部を切捨てさせてしまつた。太閤は茶室より朝顏の花が見たいので利休の招待を受けたのであつた。ところが、利休の家へ來て見ると、朝顏は一つも彼の眼に觸れなかつた。頗る不興の體で、彼は茶席の方へ歩を進めた。太閤は利休に向かつて、「お前の自慢の朝顏はどこに植ゑてあるか。」と詰問した。利休は無言であつた。太閤は更に一層



不興の顏を顰めながら茶席へ入つた。茶席へ入つて座につき、顏を床の間の方へ向けると、朝顏の花一輪が妖嬌たる姿をそこに顯して居つた。それは恰も忘れられた日光の一片が床の間で、輝いてゐるといふやうな工合に見えた。太閤の喜は非常であつたに相違ないが、話はさう詳細にわたる必要はない。要は利休が花の全部を庭から捨てさせ、たつた一つの朝顏に一大名譽を輝かせた點にある。

利休のこの處置は、前に述べた將軍秀次の處置と同程度に價値づけねばならない。實に芳ばしい藝術的態度であるといはねばならない。私は利休に對して茶人としてよりは寧ろ廣い意味での詩人として敬意を拂ふ。この態度は九十九枚の繪を燒いて一枚だけを取つて置く美術家の態度である。私は光悅や宗達や光琳はこの態度の人であつたに相違ないと思ふ。庭の朝顏を捨ててしまつた利休の態度は、九十九の作を捨てて、一つだけの發句を殘さうとする俳人の態度である。私は芭蕉は確かにこの態度の人であつたらうと思ふ。そして、この態度こそは、日本人の永い文化の生んだ最も偉大なもので、優に世界に誇ることが出來ると思ふ。

床の間の上で一本の草花が歌ふ獨唱(一)に何たる孤獨の權威があるであらう。この孤獨は感激が靜止した心理狀態で、その歌ふラプソディー(二)には麗しい抽象的な神祕がある、暗示がある。その中から精神的雰圍氣が夢のやうに、また幻のやうに放散されることを感じる。獨唱の生活には自己の保全がある、個人格の充實がある。我々日本人の古い文化が生んだ藝術家は、畫家でも歌人でも俳人でも、悉く獨唱的生活の信者であつた、歎美者であつた。その生活の中から永遠無終の藝術が生まれたのである。私は獨唱家としての山上の一本松を歌つて、かういふ言葉を書いてゐる。

「お前の獨唱家としての態度には、獨立の大きな威嚴がある。

(一) Solo.
(二) Rhapsody.

そして、その獨立は沈默と孤獨の聖なる空氣の中で育つたものだ。

お前をお前のみたらしめるお前の獨唱、あゝ、お前の銀のやうな獨唱に、

何たる壯嚴な森嚴を私は感じるであらうか！

私は泣かないばかりの感激をお前の獨唱に感じた。

多少たりとも個性は合唱の場合に破れる。だが、

「獨唱は自己表現の完全なものである。」

獨唱家なればこそ利休は偉人であつた、光悅は偉人であつた、芭蕉は偉人であつた。獨唱的態度から日本にこの態度がなく、またこの態度の藝術家がないとすると、藝術國としての日本の特徵は既に亡びたものである。新古今集にある定家の歌に、(一)見渡せば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕暮。とあるが、孤獨に生きる普遍

(一)新古今集秋歌の部にある。

的寥味は、日本藝術が最高潮に達した場合である。寂寞の中に靈の無礙自在を發見して、人生の恍惚に入ることが日本人の見出した詩の神祕でなくて何であらう。今日の日本人がこの神祕を失ひつつあるのは遺憾である。一度この神祕を失つたが最後、二度とそれを取返すことは出來ない。日本人は變つた神祕を發見するかも知れないが、その時がくるまでは、詩の上での亡國といはねばならない。私は亡國民となりたくない、私はどこまでも我々が創造した詩の神祕を握つてゐたい。

八　富嶽の詩神を懷ふ

北村透谷(一)

空を望んで駿驅する日陽、虛に循つて警立する候節、天地の運流いつを以て極みとはするならん。

旦に平氏あり、夕べに源氏あり、飄忽として去り、飄忽として來る。

(一)詩人、思想家。名は內太郎。明治二十七年歿、年二十七。萬物の聲と詩人。鬼心非鬼心等の著がある。

虛に循つて警立す

飄忽

遺魄
忙々促々
大暮の同寐
邈冥
叱咤
俗眼者流
冉々

一潮山を噬んで一世紀沒し、一潮退き盡きて他世紀來る。歴史の載するところ一潮毎に葉數を減じ、古苔むしつくして英雄の遺魄日に寒し。あゝ、人生の短期なる、きのふの紅顏けふの白頭。忙々促々として眼前のことに營々たるもの、悠々綽々として千載のことを慮るもの、同じくこれ大暮の同寐。霜は香菊を厭はず、風は幽蘭を容さず、忽ち逝き忽ち消え、邈冥として踪ぬべからざるを致す。

墳墓何の權かある。宇内を睥睨し、日月を叱咤せし英雄何すれぞ墳墓の前に弱兎の如くなる。誰か不朽といふ字を字書の中に置きて、而して世の俗眼者流をして縱に流用せしめたる。あゝ、墳墓汝の冷々たる舌、汝の常に餓ゑたる口、何者をか噬まざらん、何物をか呑まざらん。而して墳墓よ、汝もまた遂に空々漠々たり、水流滔々として洋海に趣けども、洋海は遂に溢れて大地を包まず。冉々として行暮する人世、遂に新たなるを知らず、また故なるを知らず。

朽ちざるものいづくにかある。死せざるものいづくにかある。われ答を待ちて躊躇せり。而して答遂に來らず。朽ちざるに近きものいづくにかある。死せざるに近きものいづくにかある。われこの答を聽かんが爲に、過去の半生を逍遙默思に費せり。而して遂にその一部を聽けりと思ふは非か、非ならざるか。

天地の、わかれし時ゆ、神寂びて、高く貴き、駿河なる、富士の高嶺を、天の原、振りさけ見れば、渡る日の影も隱ろひ、照る月の、光も見えず、白雲も、いゆき憚り、時じくぞ、雪は降りける。語り繼ぎ、いひ繼ぎ行かん、富士の高嶺は。（山部赤人）

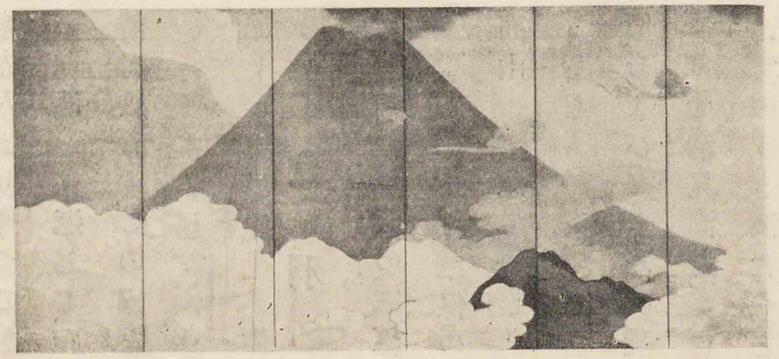
白雲、黑雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、これ等のものを用役し、これ等のものを使僕し、これ等のものを制御して、而して恆久不變の威靈を保つもの、富嶽よそれ汝か。渡る日の影も隱ろひ、照る月の光も見えず、晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す。富嶽よ、汝こそ不朽不死に邇

靈山出現（野田九浦筆）その一

きものか。汝が山上の浮雲より早く消え、汝が山腹の電影よりも速に滅する浮世の英雄何の戯ぞ。勇しや汝の山麓を西に馳する風。快しや汝の山嶺を東に飛ぶ風。流轉の風出汝に迫らず、無常の權汝を襲はず。自由汝と共にあり。國家汝と共に樹てり。何をか畏と現せん。

遠く望めば美人の如し。近く眺むれば威嚴ある男子なり。アルプス山の大歐文學に於ける、我が富嶽の大和民族の文學に於ける、淵源するところ、關聯するところ、豈寡しとせんや。遠く望んで美人の如く、近く眺めて男子の如きは、そも我が文學史の證する

飄遊
崛起



靈山出現（野田九浦筆）その二

ところの姿にあらずや。アルプスの崇嚴或はこれを缺かん。然れども富嶽の優美何ぞ大いに讓るところあらん。我はこの觀念を以て我が文學を愛す。富嶽を以て女性の山とせば、我が文學も恐らく女性文學なるべし。雪の衣を被ぎ、白雪の頭巾を冠りたる恒久の佳人、我はその玉容を樂しむ。

盡きず朽ちざる詩神、風に乘り雲に御して東西を飄遊し給へり。富嶽駿河の國に崛起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天涯よりその山巔に急げり。而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐り棲みて、遂にまた去らず。これより風流の道大いに開け、人

シテ　天人
ワキ　白龍
ツレ　漁夫

(一)三保とも書く。靜岡縣清水港の南に突出してゐる松原。「風早の三穂の浦曲をこぐ船人さわぐ波たつらしも。」(萬葉集卷七、作者不詳)

(二)「千里好山雲作斂。一樓明月雨初晴。」(詩人玉屑に見える)

(三)「忘れずよ清見が關の波間より、霞みて見えし三保の浦松。」(續古今集、中務卿)

(四)「風むかふ雲のうき波たつと見て、釣せぬさきに歸る舟人。」(藤原爲相)

九　羽衣

ワキ一聲「風早の三穂の浦曲をこぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。

サシ「これは三保の松原に、白龍とまをす漁夫にて候。ツレ「萬里の高山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げに長閑なる時しもや、春のけしき松原の、浪たち續く朝霞、月ものこりの天の原、およびなき身の眺にも、心空なる景色かな。歌「忘れめや山路をわけて清見潟、遙かに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風むかふ雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝凪に、釣人多き小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原にあがり、浦の景色を眺むるところに、虛空に花ふり、音樂聞え、靈香四方に薫ず、これたゞごとと思はぬところに、これなる松に、美しき衣懸れり、よりて見れば色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞「なう、その衣は此方のにて候。何しに召され候ぞ。ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候ほどに取りて歸り候よ。シテ「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものに非ず。元の如くに置き給へ。

ワキ「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。シテ「悲しやな、羽衣なくては飛行の途も絶え、天上に還らんこともかなふまじ。さりとては返したび給へ。ワキ「この御詞を聞

とやあらんかくやあらん

(一)一は頭上天花忽萎。二は天衣塵垢所著。三は腋下汗出。四は兩目數瞬。五は不レ樂ニ本居。

(二)「天の原ふりさけ見れば霞立ち、家路惑ひて行方知らずも。」(丹後風土記)

くよりも、愈、白龍力を得、もとよりこの身は心なき、天の羽衣取隱し、かなふまじとて立ちのけば、シテ「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ「地にまた住めば下界なり。シテ「とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ「白龍衣を返さねば、シテ「力及ばず、ワキ「せんかたも、地「涙の露の玉かづら、かざしの花もしをしをと、天人の(一)五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ「(二)天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路惑ひて行方知らずも。歌

地「住馴れし、空にいつしか行く雲の、羨ましき景色かな。迦陵頻伽のなれなれし、聲今更に僅かなる、雁が音の歸り行く、天路をきけば懷かしや。千鳥、鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまで懷かしや。

ワキ詞「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御いたはしく候ほどに、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あら嬉しや、此方へ賜はり候へ。ワキ「暫く。承り及びたる天人の舞樂、たゞ今ここにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ「嬉しや、さては天上に還らんことを得たり。このよろこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。たゞ今ここにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとてはまづ返し給へ。ワキ「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ「いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキ「あら恥づかしや、さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨にうるほふ花の袖、ワキ「一曲を奏で、シテ「舞ふとかや。地「東遊の駿河舞、この時や初めなるらん。

疑は人間にあり

霓裳羽衣の曲

地「それ久方の天といつは、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、久方の空とは名附けたり。シテ、サシ

玉斧の修理

(一)「春霞たなびきにけり久方の、月の桂も花や咲くらん。」（後撰集、紀貫之）

(二)「天つ風雲の通路吹きとぢよ、をとめの姿しばしとゞめん。」（古今集、良岑宗貞）

「然るに月宮殿のありさま玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣、黒衣の天人の、數を三五に分つて一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ「我も數ある天少女、地「月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ「春(一)霞たなびきにけり久方の、月の桂の花や咲く。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。おもしろや天ならで、ここも妙なり天つ(二)風、雲の通路吹きとぢよ。少女の姿しばしとどまりて、この松原の春の色を三保がさき、月清見潟、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も松風も、長閑なる浦のありさま。その上、天地は何を隔

羽衣の能

(一)「君が代は天の羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬ巖なるらん。」（拾遺集、よみ人しらず）

(二)「笙歌遙聞孤雲上。聖衆來迎落日前。」（大江定基の詩）

(三)「北は黄に南は青く東白、西くれなゐにそめいろの山。」（紫式部）本地

(四)愛鷹山。

てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ「君が代は、天の羽衣稀にきて、地「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへてかずかずの、笙笛、琴、くご、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山を寫して、緑は浪に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無歸命月天子、本地大勢至。地「東遊の舞の曲、シテ、ワキ「あるひは天つみ空の緑の衣、地「または春立つ霞の衣、シテ「色香も妙なり少女の裾、地「左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、なびくもかへすも舞の袖。舞「東遊のかずかずに、その名も月の宮人は、三五夜中の空にまた、滿月眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さるほどに時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲のあしたか山や、富士の高嶺微かになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。

――謠曲――

(一)元明天皇の御代諸國に命じて上進せしめられた地方誌。

自修文

羽衣の傳說

駿州の三保の松原、空も水も一つ色に澄みわたつて、遙かに見やる富士の高嶺の雪、近くは寄返る荒磯の波と天地を青と白とに染分けてゐる。いづくよりともなく、一片の白雲のやうにひらりとここに下り立つたものがある。照る日に輝く薄衣を松が枝にかけて、清い汀に浴したのは天つ少女である。白龍といふこのわたりの漁夫、この薄衣を松の上に見つけて携へて歸らうとする。それを取られては再び天に上ることかなはず、是非返し給へと歎けば天人の舞樂を奏し給はば返し申すべしと、ここに奏づる霓裳羽衣の曲。天つ少女は羽衣を得て天上へ歸つて行くといふのが謠曲「羽衣」の概要である。謠曲の文には佛語が加つてゐて、その文を見ると、御寺の欄間などに彫つてある天女を聯想するが、これは我が太古から傳はつた神話である。しかもそれが方々にあつたのである。

古い風土記(一)の今日に殘つてゐる文から見ると、近江國と丹後國とに同じやうな話がある。近江國伊香郡與胡郷伊香小江に、八人の天つ少女が白い鳥となつて、天から下つて江の南の津に浴した。伊香刀美といふ男、こは神に相違なからうと狙つてゐたが竊に白犬をやつて一人の天女の羽衣を盜ませた。天女はその爲に天上に歸ることが出來ず、伊香刀美の妻となり、男女各二人の子を產んだ。

(一)今の中郡。

春霞（西山翠嶂筆）

もう一つは丹後國丹波郡三家西北の隅の方に、比治里(一)といふ所がある。この比治山の頂に眞井といふ井があつたが、或時天女七人ここに來て浴した。わなさ老夫、わなさ老婆といふ老人夫婦がこれを見て、その一人の羽衣を取隱した。その天女はやむなく老夫婦の子となつて、十年ほど住んだが、その間に天女はよい酒を釀し、一杯飲めば萬病立ちどころに癒るといふので、老夫婦は忽ちに富み榮えた。然るに恩知らずの

老夫婦はその後この天女を追出したので、天女は天に歸ることも出來ず諸所を流浪したといふ話である。白鳥の下つた話はなほ常陸風土記にも見えてゐて、その話に多少の相違はあるが、とにかくよほどひろく傳播(でんぱ)した話らしく見える。

謠曲の「羽衣」は、畢竟この美しい古傳說を基礎として作つたものである。

ところが面白いことには、これは決して日本固有のものではなく、世界中に弘く擴がつてゐる話である。西洋では白鳥卽ち(一)スワンが最も美しい上品な鳥と考へられてゐるが、天女がこの白鳥となつて浴してゐる中にその羽を取られて歸れなくなるといふ同じ筋の話が澤山ある。よつて傳說學者はこれを(二)スワン・メイドン式の傳說と名づけて居る。所々國々によつて少しづつ違ふが、大體の筋は變らぬのである。スエーデンでは若い獵師が、三つの白鳥が羽を棄てて水中に浴するのを見付けた。その中の一つの羽衣を隱して置くと、他と一緒に歸れぬので、遂にその獵師の妻となつたといふ。ロシヤの(三)ミハイロ・イワノウィッチといふ男は、海邊を逍遙して、水中に浴してゐる一羽の白鳥を見た。矢を以て射取らうとすると、やがて美しい女となつて現れた。白鳥ばかりでなく、外

(一) Swan.
(二) Swan Maiden.
(三) Michailo Ivanovitch.

の鳥の話になつてゐるのもある。極北に近い(一)フィンランドの話では、死んだ父親が三人の息子の夢枕に立つて、夜海邊へ行つて雁を見よと告げる。二人は闇を恐れて行かなかつたが、末の子は夜中張番(はりばん)をしてゐる。明方に三羽の雁が來て、皆その羽を脫いで、美しい少女となつて海水に浴した。その中の最も美しい一人の羽衣を隱して渡さぬので、少女はその男の妻となつた。雁ではなくて家鴨と傳へられてゐる所もあるが、また或地方では鳩になつてゐるのもある。

地つゞきのアジヤ、ヨーロッパばかりでなく、南アメリカの(二)ギヤナにも同じ話がある。(三)アラワックスといふ土人の話に、或時一人の獵師が美しい鳥をつかまへた。これは天上に國を有する(四)王樣(五)アヌアニマの娘で、やがて人間の形になつて、その獵師と結婚したといふ。エスキモー(六)ではその鳥が海鳥になつてゐる。またポメラニヤの話に次のやうなのがある。獵夫が森の中をたどつて沼の脇へ出ると、一人の少女が沐浴してゐるのを見た。多分近所の村からでも來たものと考へて、いたづらにその着物を隱した。少女は水から上つて、是非返してくれといふのを拒絕して、遂にその少女を妻とした。その着物は錠をおろして簞

(一) Finland.
(二) Guiana.
(三) Arawax.
(四) Anuanima.
(五) Esquimau. (Eskimo)
(六) Pomerania.

筒の中へ入れて置いたが、夫の不在中、妻はその姑に向かつて、是非その着物を見せてくれといふ。姑がそれを出して見せると、忽ちそれを持つて見えなくなつてしまつた。夫は歸宅して妻の行方を尋ねるとて、これからいろいろな冒險譚になるのである。或地方になると、鳥ではなくて獸になつてゐるのもある。

海豹（あざらし）が毛皮を脱いで浴してゐる話もある。

白鳥が雁や、鳩や、いろいろな鳥になり、はては獸にまで變つてゐるが、その道筋は全く同じである。これはその國の風土、動植物の差から起つてくるのである。謠曲の「羽衣」には鳥のことはないが、前に擧げた近江、丹後、常陸などの風土記の話も、皆白い鳥である。天から少女が下つたといふ話には、天武天皇が吉野の瀧の宮にお出でになつて、たゞ一人琴を彈じていらせられると、雲の中で少女が袖を振つて踊つたのを御覽ぜられたことがある。これがそもそも五節（ごせち）の舞といふものの初めであるが、つまりは同じ種類の話である。かういふ世界一般に擴がつた話が太古からあるといふことは、面白いことではないか。

（一）昔十一月中の丑の日から新嘗祭（にいなめまつり）の次の日の豐明節會（とよのあかりのせちえ）にわたつて行はれた女樂。舞姫が五人天女に擬し、五たび袖をひるがへして舞ふ。

一〇　御堂關白

（一）花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしく搔亂れ雨のふる夜、帝さうざうしくや思し召しけん、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人々御物語申しなどし給ひて、昔恐しかりけることどもなどに申しなり給へるに、「今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに、けしき覺ゆ。ましてもの離れたる所などいかならん。さあらん所に一人いなんや」と仰せられけるに、「え罷らじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は「いづくなりとも罷りなん」と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、「いと興あることなり。さらば行け」道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ行け」と仰せられければ、よその君たちは、便なきことをも奏してけるかなと思ふ。また承らせ給へる殿原

（一）花山法皇。第六十五代花山天皇。讓位後花山院に入御。

さうざうし

むづかしげ

けしき覺ゆ

（二）藤原道長。

さる所おはします

（三）藤原道隆。道長の長兄。

（四）藤原道兼。道長の仲兄。

便なきこと

は御氣色變りて、益なしと思したるに、入道殿は露さる御氣色もなくて、「私の從者をば具し候はじ。この陣の吉上まれ、瀧口まれ、一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には、一人入りはべらん。」と申し給へば、「證なきこと。」と仰せらるゝに、「げに。」とて、御手箱におかせ給へる刀申して立ち給ひぬ。今二所もにがむにがむ、各おはしましぬ。

子四つと奏して、かく仰せら。れ議するほどに、丑にもなりにけん。

「道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ。」と、それをさへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、宴の松原のほどに、そのものともなき聲どもの聞ゆるに、ずちなくて歸り給ふ。粟田殿は露臺の外まで、わななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、ものも覺えで、身の候はばこそ仰言も承らめ。」とて、各立歸り參り給へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふ

にがむにがむ
子四つ
丑

(一)道隆。
ずちなし
(二)道兼。

に、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかがと思し召すほどにぞ、いとさりげなくこととにもあらずげにて、參らせ給へる。いかに。いかに。」と問はせ給へば、いとのどかに、御刀に削られたるものを取具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ。」と仰せらるれば、たゞにて歸り參りてはべらんは、證さぶらふまじきによりて、高御座の南おもての柱のもとを削りて候なり。」とつれなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。こと殿たちの御氣色はいかにも直らで、この殿のかくて參り給へるを、帝より初め感じののしられ給へど、羨ましきにや、またいかなるにか、ものもいはでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、つとめて藏人して、「削屑を遣して見よ。」と仰言ありければ、もて行きて、おしつけて見たうびけるに露違はざりけり。その削跡はいとはなはだしやかにてはべるめり。末の世にも見る人は、なほあさましきことにぞ申ししかし。

一一　石彫獅子の賦

薄田泣菫[一]

(一)詩人。名は淳介。明治十年岡山縣に生まれた。暮笛集。行く春。茶話。大地頌讃等の著がある。

一

番者に問へば石工は、木かげの夢に耽りぬと、
入りて小暗き仕事場に、刻みさしたる唐獅子の
圓き頸を手になでて、誰ぞ吟ずるは、靜やかに。

朽木の棚にすゑられて、顔くすぼるゝあら彫の
豕、狗児、野の狐、さてはを鹿のむらがりに、
こは秀でたる驕かな、日浴びて立てる獅子の影。

裂けたる岩に爪かけて、雄々し、いかるかその姿、
たてがみ長く背にまきて、見れば湧きよる春の潮。
胸はゆたかに力男が、ひきしぼりたる弓のごと。

忿怒現ずる明王の　ひろき肩より燃えあがる
焔か、ながき尾は躍り、　綿毛密なる脚の裏、
落ちし野薔薇の花ふむも、　巣くへる鳥はめざめんや。

(石工妙じき心得よ　やの、考へた。
光を知らぬ盲目の身、　瞳子彫られぬ唐獅子は、
いまだ前脚ふみあげて、　鼻かんばしき香を嗅ぐも、
花園小路みださじよ。

鑿の手またく捨てられて、　御苑の夏のあけぼのや。
緑したゝる木のかげに、　巨人の如く立たんとき
雄姿いかに。背に伏して　しばし想像にふけらせよ。

二

汝の王者かたどられ　眞白き石に刻まれぬ。
野より山より林より、　つどへよ獸、列なりて
蹄の前にひざまづき、　弱きを恥ぢて僕たれ。

偉なる靈魂くだりきて、　眞白き石に包まれぬ。
野より山より林より、　つどへよ獸、列なりて
その光輝に浴みぬべく、　卑き心をなげうてよ。

大なる權威あらはれて、　眞白き石に具せられぬ。
野より山より林より、　つどへよ獸、列なりて
王にさゝぐる燔祭の　聖き火盞を整へよ。

斑の牛と羚羊は、　ふかき痛手に甘んじて、

進みて燃ゆる火に燒けよ。　誇るべきかな犧牲の
高きほまれは汝にあり。　羨む群ぞおろかなる。

見よ犧牲はそなはりぬ、　獅子は額にたてがみの
ながき流をふるはせて、　あら起ちあがる「戰鬪と
勝と力の權化なり、　伏せよ。」と呼べば皆伏しぬ。

○さかんなる哉その令や、　自然は死せりとことはに、
人は魔のごと強からず、　われは王者ぞ、萬有の
値の源ぞ、わづらひと　もだえの胸のあるじなり。

あゝ、運命の眩きをも、　眼ひらいてながめ入り、
胸わなゝかぬ雄心の　若き勇氣に溢れたる

勝利のおもひに漲れる、　この身この世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、　われは汝の伴なりと、
聲は喇叭の音に似たり。　時に黙止はやぶられて、
たかき讃美と服從は、　雷のとよみに現れぬ。

三

いま想像の羽たゆむ。　見れば唐獅子日を浴びて、
豐かにもまた靜かなる　すがた何等の誇ぞや。

石彫ながく傳はりて、　榮とならんは幾千歳。
あゝ、藝術は支配せよ。　とはの生命ぞ汝に歸する。

——泣菫詩集——

一二　世界の四聖

高山林次郎[一]

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰かこれをよくせんや。釋迦、孔子、[二]ソクラテース、キリストの四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西暦紀元前およそ六百年の頃、印度[三]伽毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名は悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳、その妻子を棄てて王城を遁れ、山林に隱れて道を修むること六年、遂に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋[四]提河の邊に歿しぬ。今の佛教は卽ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し

(一)評論家。思想家。文學博士。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。灌口入道。わが袖の記、況後錄等の著がある。

一代の宗師　百世の儀表

(二)Socrates. ギリシヤの哲學者。(西暦前四七〇年—三九九年)

(三)伽比羅衞とも書く。

成道

正覺

巡錫

(四)ガンジス河の支流。

談理

元々歸命の大道

木鐸

令聞

(一)景公。

釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を喜びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。その流派を樹てて相爭ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道につかしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。

孔子

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を敎へて夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、內外その風采を想望す。時に齊王、魯國の

老軀を挺す

門下の高足

蕩然として地を拂ふ

敎化の陵夷

狂瀾を既倒に廻らす

老脚蹉跎

日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方に遊說を試みぬ。當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、或は子にしてその親を害するものあり。强は弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。敎化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且つ大なりといふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名敎に傾くるものなし。ここに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼、我が道遂に窮す。世遂に我を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めていはく、「何ぞ夫子を知る

下學して而して上達す

(一)Athens.ギリシヤの首府。

詭辯學派

諄々として倦まず

ものなからんや。」孔子答へていはく、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。我が道行はれずんば、我何を以てか後世に見えんや。」と。後いくばくもなくして歿す。時に年七十三。

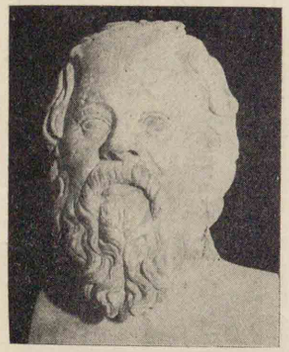
ソクラテースはギリシヤのアゼンス(一)府に住める一彫刻師の子なり。その生まれたるは、およそ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。ギリシヤの當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭にとゞまり、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。その狀、なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して殆ど稗益するところなかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救濟を以てみづから任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、即

侃諤の正議

喬木は風に折らる

ちその獨得の論法を以て辯難攻擊して一歩も假借せず。侃諤の正議、その稀代の雄辯と相俟ちて一世を風靡せり。

然るに「喬木は風に折らる。」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀にいはく、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。よろしく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテースがこの讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、いはく、「命のみ。」と。その獄中に在るや、常に門弟子を集めて、生死、靈魂、未



ソクラテース

何爲るものぞ

(一)Asklepios. エスクラピウスともいふ。醫藥の神。

(二)Judea. (猶太)

(三)Bethlehem. エルサレムの南約二里餘。

(四)Joseph.

(五)Johannes. 當時の學者で宗教家。

來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、乃ち答へていはく、「余はたゞ正義に導かれんのみ。死また何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。遂に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテースいはく、「爾一鷄を以てアスクレピアス(一)の神に捧げよ。」と。蓋し、曾て病みし時平癒を祈りて、謝を致すことを忘れしが爲ならん。ギリシヤの聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

キリストは本名を耶蘇といふ。キリストとは「膏灌がれたるもの。」といふ義にして、敎徒の奉れる尊稱なり。ユダヤ(二)のベトレヘム(三)に生まる。その生後四年を以て西曆紀元第一年となす。父はヨセフ(四)とよべり。賤しき木匠にして、母をマリヤといふ。長じて三十歲の頃、豫言者ヨハネ(五)の洗禮を受けて、初めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間ユダヤの各地を歷遊し、諸〻の迫害に屈せずして、その福音を傳へた

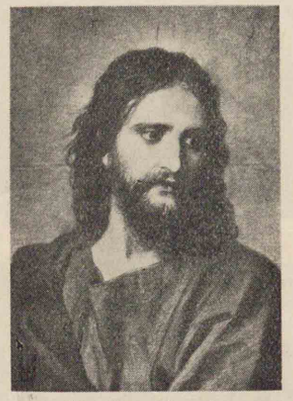
胚胎す
寧日なし

放縱の俗

救世の使命

晏然

り。抑〻當時はローマ帝國の榮華正にその極に達し、禍亂の萌芽內に胚胎し、災異頻りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國たるユダヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇なる淫祠を崇拜して益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。ここに於て一世の人心は悉く偉人の現出してこの暗黑なる社會を照破せんことを渴望せり。キリストこの間に生まれ、みづから救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新敎理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等はこれを喜ばず、以て猥りに新法異說を唱へて民を迷はすものなりとなし、キリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこのことあらんを慮り、晏然として騷がず、靜かに祈りて



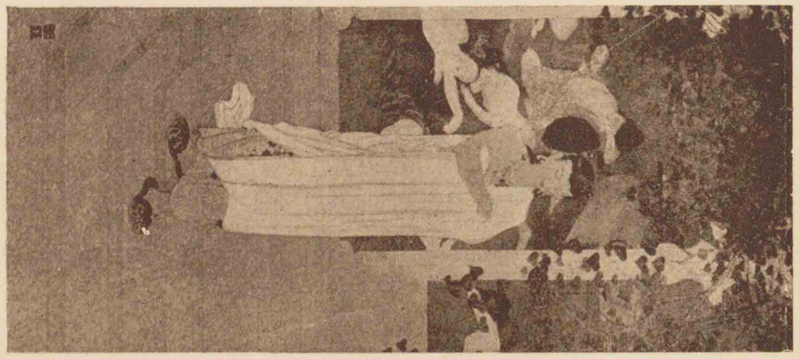
トスリキ

いはく、「神よ、彼等を赦せ。彼等はそのなすべきところを知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧ていはく、「エルサレムの女子よ、我が爲に哭くこと勿れ。たゞ己と己の子との爲に哭け。」と。かくの如くしてキリストは三十三年の短命を以て、十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教卽ちこれなり。

高山林次郎

以上は四聖の略傳なりその人物、事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖の中釋迦を除きては、いづれも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテースとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔

轗軻不遇



三大門

町田曲江筆

浩大無邊

殺せられたり。悲慘なりといふべし。然れどもこれ等の人々の志すところは天下後世に在り、現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏然としてなほ歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つて「我が道行はれずんば、我何を以てか後世に見えん。」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲にその妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言していはく、「正義を信ずるものにとりて、死はた何爲るものぞ。我をして一日の生あらしめんか、その一日卽ち國民の迷を醒さざるべからず。」と。キリストは己を罪に陷るゝものの爲に神に祈りたり。あゝ、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なる。

——樗牛全集——

一三　永遠の生命

亘理章三郎[一]

(一)倫理學者。東京高等師範學校教授。國民道德序論。少年鑑等の著がある。

個人の生命には限りがある。永遠を求め無窮に憧れても、限られた生命はいかんともし難い。生きた者の惱みはそこに發生するのである。そこでどこかへ永遠の生命を見出したいといふところから宗教は次の世に天國とか極樂とか、乃至は淨土といふやうな世界を假定し、そこに永遠の生命があるとして、人間を導き且つ勵ましさうとする。然るに我が日本精神は、その永遠の生命をさうした無可有鄉に求めないで、現實なる日本の國そのものに見出してゐるのである。我等日本民族は、この國を愛することによつてこの國に永遠に生きるのである。この五尺の身體は數十年を待たずして死んでも、この國を愛する一念によつてこの國に永遠の生命を創造する、これぞ日本精神に他ならぬのである。

心をし無可有の鄉に
おきなくば
魂は射るとも
羅鄉
見まし物かは。

無可有鄉

故に我等は代々、我等の祖先の魂はこの國と共に永遠に生きつつあり、永遠にこの國を護つてゐると信じて來た。江戸中期の學者若林强齋は、大和魂の立志といふことを述べて、よくその點を明らかにした。卽ち彼は「志を立てるのはこの五尺の身體の生きてある間だけではない。この身體はたとへ衰へても、斃れても、天の神より下し賜はる御玉――靈魂をどこまでも忠孝の御玉と守り立て、天の神に復命して八百萬の神の下座に列り、國家を鎭むる靈神となるに至るまでずんと立て通すことである云々」といつてゐる。我が日本の國民は誰でも、赤誠を以て國の爲に力を盡くすならば、その清らかな精神は神そのものとなつて、永遠の生命を續けることが出來ると明らかに敎へてゐるのである。

維新前にあたつて若き日本の士氣を鼓舞作興した藤田東湖、あの東湖の有名な回天詩の一節に「苟くも大義を明らかにして人心

を正しうせば、皇道爰んぞ興起せざるを憂へん。斯の心奮發神明に誓ふ。古人言ふあり斃れて後已む。」といふのがある。苟くも大義名分を明らかにして曲つてゐる人間の心を正しうしたなら皇道が何で興起せぬことがあらう。自分は發奮一番、神明に誓つて人心を正す積りである。息の根の通ふ限り飽くまでそのことにあたる。それで遂に斃れたら、古人のいふ通り萬事已むのだといふ雄々しい志を述べたものである。

粹然

然してその翌年に出來たかれの正氣の歌は、劈頭日本の地理を詠んで、粹然として神洲に鍾る正氣卽ち大和魂が如何に立派な國史を作り來つたかを讃へ、次いで永遠に死なぬ日本精神の活動にいひ及び「乃ち知る人亡しと雖も英靈未だ曾て泯びず、長へに天地の間に在りて隱然彝倫を叙すると」と續けて、忠臣義士の精神力は決して肉體と共に亡びるものでないことを說き、さて末尾に至つ

彝倫

君寃

極天

て自分の覺悟を述べて、

「生きては當に君寃を雪ぎ、復皇維の張るを見るべし。死しては忠義の魂となり、極天皇基を護らん。」といつてゐる。これは自分の生きてゐる間は主君烈公齊昭の寃を雪いで、道德をこの世に明らかにする、が死んだら忠義の靈魂となつて天地のあらん限り永遠に皇基を守り奉らうといふのである。

箴言

前年の回天詩では、生きてゐる中はやるが、死んだらば萬事已むのだといつてゐたが、今や生きてゐる中は勿論、死後と雖も活動は休止せぬといふ考に進んだのである。

元來「死して後已む」といふ言葉は、支那の論語にあるのだが幼少からこの書を精神の糧としてゐた彼は多分にその感化を受けて、それを箴言としてゐた。然るにその後、だんだん我が國史の精神に深く入つて、幾多忠臣義士の研究を進めると「死して後已む」などい

ふところへは留まつてゐられず、ここに天地のあらん限り皇基を護るといふ日本精神の體現者となつたのである。吉田松陰もまたさうであつた。かの有名な士規七則には「死して後已むの四字、言簡にして義廣し。堅忍果決、確固拔くべからざる者は、これを舍てて術なし。」卽ち死して後已むといふことこそ男兒が覺悟を定める唯一無二の方法だとしたのである。然るにその翌年になると楠公七生の說を作つて、楠公兄弟は七度生まれかはつたところではない。永遠に不死なのだといひ、ここに明らかに、日本精神の永遠の生命に悟入したのである。その絕筆の留魂錄には、雄々しくも

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも
留めおかまし大和魂

と詠じてゐる。東湖、松陰の兩英傑が支那精神の粹から一轉して、日本精神の粹を自覺するに至つたといふことは、いかにも意義深いことといふべきである。この兩英傑の覺悟、自覺こそ、實に日本精神が、皇國に永遠の生命を見出すといふ最もよき例證であると思ふ。誠にこの皇國を愛し永遠の生命を創造していつてこそ、始めて我々はほんたうの日本人になり得るのだといふことが出來るのである。

一四　みくにまなび

平田篤胤[一]

學問にはいろいろある。その中に何の學問がいつち大きいぞといふに、ちと自分勝手のやうなれども、皇國卽ち我が國の學問ほど、大きいものはないでござる。なぜといふに、まづ近く儒學と佛學との上で申さば、儒者は最初四書五經とか、十三經とかいふ類の書物を讀むことを覺え、また左國史漢といつて、左傳といふもの、國語といふもの、史記といふもの、漢書といふものなどをあらあら讀んで、

(一)江戸時代の國學の大家。羽後國の人。天保十四年(一八四三)歿、年六十八。古史成文、古史徵、古史傳等を初め百餘種の著がある。

おもと

さて漢文を綴る方を覺えたり、そのふだんの口ずさみに詩を作ることでも覺えると、もう儒者といつて通られるが何のこれしきの書物を讀んで、これしきのことを覺ゆるに、さして難いことは、ありやいたさんでござる。大方世間の儒者は、皆このくらゐなものでござる。

さてその儒者に比べては、出家の方がよつほど廣い。なぜといふに、己が是非讀まねばならぬときめた俗にいふ經文が五千餘卷、馬につけたならば、七八駄あらう。それをみんな讀まず、十分の一を讀んだところが、ざつと儒者がおもと讀まねばならぬ書物の一倍もあるでござる。それのみならず、儒者は佛書を讀まんでも、事が缺けぬによつて、とんと讀まず。たまさか佛書を讀む儒者もあれど、そりや百人に一人もない。僧徒はそれとことかはり、儒者のおもと見る書物をば、子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。また詩も漢文

八紘九野
天漢

春秋命歴序考をかきたてしりへに日本の神の授けしからの道から人の開きいかて得めやも日の本人そ開き初ける篤胤

も儒者と同じやうに作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いでござる。

さて皇國の學問がいつち廣いといふ故は、右申す通り、儒學、佛學を初め、種々さまざまの學問があつて、その道々のこころと事とが、盡く皇國の學びごとに混雜して、譬へば、彼の八紘九野の水、天漢の流これに注がずといふことなしといふ如くでござる。その通り入混つてある故に、人の心もそれに從つて移り、いづれを是とも、いづれを非ともわかちかねて、いはばまごついてゐることが多くある。それ故に、その混雜をつぶさに分けねば、眞の道の有難き所も顯れず、その混雜をより分けて、眞の道の害となることをいひ顯さうと

平田篤胤筆蹟

(一)宋の蘇軾の弟轍。政和二年(西暦一一一二年)歿、年七十四。

するについては、よく先方のことをも知らねばならず。かの唐人蘇(一)子由といふものの「善與人言者。因其人之言。而爲之言。則天下之辯者服矣。云々」と申したる如く、此方のことばかりいつたのではいかず。例へば、僧徒を諭すには佛書でいふと、ぎうの音も出ず。儒者を諭すには儒書で論ずれば、猫に追はれた鼠のやうにかしこまる。されば皇國の純らと正しい道を得ようとするには、それに心得なくてはかなはぬことでござる。殊にもろもろの學問の道、たとひ外國のことにしろ、皇國人が學ぶからは、そのよきことを選んで、皇國の用にせうとのことでござる。さすれば、實は漢土は勿論、天竺、阿蘭陀の學問をも、すべて皇國まなびといつても違はぬほどのことで、即ちこれが皇國人にして外國のことを學ぶものの心得でござる。

——古道大意——

(一)文學博士。東京の人。陸軍教授兼東京帝國大學教授。その著「我が國體と神道」は廣く讀まれてゐる。

逆境の恩寵　まゝならぬ境遇の賜物。

零落　おちぶるゝこと。

自修文

逆境の恩寵

加藤玄智(一)

新聞を賣りながら苦學する。牛乳を配達しながら學校に通ふ。いかにもつらい。朝も早く起きなければならぬ。夜も寢るのが遲くなる。その前後僅少な時間を割いて學問を勉強しなければならない。どうも苦しい。これが華族の若樣に生まれたなら、富豪の子弟であつたならばと、時々愚痴も出る。女學生にしてもさうである。家が零落して父は既に逝き、母は病身、女中も使はず、臺所の水仕事はいふに及ばず、幼い弟妹の世話までして學校に出なければならぬ。これが華族のお姫樣であつたらばと、時に我と我が身を顧て、不幸の身をかこつ涙も出よう。さあここだ。考へ直さなければならぬところはここだ。さういふ逆境が、却つてほんたうの人物を作り上げてくれるものである。所謂「艱難汝を玉にす。」で、順境に在つてしたい放題の出來るものは、遂に身を謬り易い。朝寢坊をする。毎日學校も遲刻する。金も多少は自由になるところから錢づかひも荒くなる。やれ活動寫眞だ、やれカフェーだと勝手に遊び歩く。世間ではさ

うぶ　世の惡風に染まない。
沈淪す　落ちぶれる。

盤根錯節云々　「不レ遇二盤根錯節一、何以別二利器一乎。」（後漢書）

（一）後漢書の撰者。支那南北朝時代の宋人范曄のこと。

儋石の儲　すこしのたくはへ。

ういふうぶなものを引つかけようとして、網を張つて待つてをる惡魔が澤山ゐる。遂に墮落に墮落を重ねて、救ひ難い人生の深淵に沈淪し、有爲の一生を棒に振つてしまふものが少くない。かういふのは、その人個人の不幸といふばかりでなく、國家の立場からも大なる損失である。勿論順境に在るものが皆々さうといふわけではないが、動もすればさういふ魔の誘惑にかゝり易い。これに反して逆境にあるものは、生活に餘裕が少い。腕一本、脛一本でし上げなければ、ひとり自分の一身が立ちゆかないばかりでなく、父母兄弟をも窮境に陷れる虞がある。どうしてもそんな悠長なことをしてはゐられない。自分だけでもどしどし勉强して、早くし上げてしまはなければならない。かういふ氣分だから、逆境に在る人は、學生にしても眞面目である。氣分に眞劍味を帶びてをる。石に嚙りついても成功しなければならぬといふ生存上の必要が、ひしひしと身に迫つて來てをる。この眞面目、この眞劍味、これが實に人を成功に導く偉大な原動力である。盤根錯節に遇はずんば何を以て利器を別たんやといつた古人の言、實に我を欺かぬのである。我が國學の大家平田篤胤翁が、家に儋石の儲

蘊奥　奥底。
嶄然　一段高くぬきでた有樣。
闡明　道理を明らかにあらはすこと。

黽勉　一心に努力する。
大器を晩成す　あわてずに大才を作り上げる。

（一）儒者。京都の人。天和二年（一六八二年）歿、年六十五。
（二）秀忠の第四子。會津松平家の祖。寛文十二年（一六七二年）歿、年六十四。

もなく、僅かに醫を業として生計を支持し、かたはら國學の蘊奥を究め、以て嶄然斯界に頭角を見したのも、一にその逆境の賜である。翁が古道の闡明にこれ日も足らずして、僅かな時間でも惜しんで勉强された爲、花鳥風月の目を喜ばし耳を樂しましめるものをも、十分賞玩する餘裕がなかつた。これ翁に花鳥風月を詠じた歌の見るべきものが少い所以であらう。或時翁はこの感懷を述べて

月花をわれもあはれと見てはあれど
あはれと歌ふひまなかりけり

といつてゐる。以て翁が貧賤の中から黽勉學

平田篤胤

心が想見されるのである。山崎闇齋（一）が曾て會津侯保科正之（二）に答へて、自分にはにいそしまれ、以てその大器を晩成された苦人の得知らぬ三つの樂みあることを告げ、第一は禽獸に生まれずして人間と生まれたこと、第二は幸に亂世兵馬の間に生まれずして生を泰平の御世に享け、靜かに古書を繙いて古聖前賢とその心交を縱にすることを得ること、第三は王

侯の家に生まれて婦人の手に成長し、無意義な一生を過すことなく、幸にも貧困に生まれて拮据勉勵、辛苦を嘗めて學問をし、先王の道を學ぶことを得たこと、この三樂中、最後の一樂こそ實に貧賤に長じたものの天與の特權であると喝破し、以て會津侯を諷諫したといふのもまた這般の消息をよく傳へて居る。

山崎闇齋

獅子は己の生んだばかりの子を、まづ千尋の谷底に蹴落して、艱難に處する訓練を兒獅子に與へるとのことである。かくして百獸の王となる資格も自然養はれるのである。順境の生む悲喜劇、逆境の與へる天惠、達觀し來れば眞に天公配劑の妙に驚かざるを得ない。

(一)世の中は何につけても塞翁の
　うまくは行かぬものとこそ知れ

しかもこのうまく行かぬところに妙味があり、大宇宙の深い教訓が含まれて居り、未來の偉人を生出す眞の訓練が存して居る。耶蘇の弟子(二)ポーロはこの點に關する自己の體驗を左の如く述べて居る。眞に味はふべきである。

(一)艱難にも喜をなせり。蓋し艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は恥を來らせざるを知る。

支那の賢哲孟子はまた左の如く說いて居る、

「(三)天の將に大任をこの人に降さんとするや、必ずまづその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その體膚を餓し、その身を空乏にし、行そのなすところに拂亂す。心を動かし性を忍んで、その能くせざるところを曾益する所以なり。」

と。古歌にいはく、

(四)うき事のなほこの上につもれかし
　かぎりある身の力ためさん

一五　千里が竹

近松門左衞門(五)

船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、あとに應護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子(六)の船、唐土の地にも着き

(一)新約全書中の羅馬書第五章の句。
(二)支那戰國時代の哲人で道德政論者。生死年は諸說不定。
(三)告子章句下。
拂亂す　逆らひ亂す。
曾益す　だんだんふやす。
(四)作者不明。
(五)江戸時代中期の淨瑠璃作者。姓は杉森。名は信盛。享保九年（一三八三年）歿、年七十二。
(六)明末の人。鄭芝龍（永曆一五年、西曆一六六一年歿）とその子鄭成功（康熙元年、西曆一六六二年歿）

拮据勉勵　一心に働き努めること。
先王の道　古の聖王のとなへた道。
諷諫す　身上の人をそれとなくいひ諭す。
這般　この。
天公配劑の妙　天帝（造化の神）の配りあはせの上手。
(一)作者不明。
(二)Paul. ヘブライ人。有名な說敎家。西曆六七年歿。

にけり。鄭芝龍一官は、故郷に歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向かひ、「我が本國といひながら、時移り代變り、天下悉く李踏天(一)が引入れにて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友、一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂(二)が、生死の樣子も知れざれば、何を以て義兵の旗を揚げ、何處を一城にたて籠るべき所もなし。然るに、某去る天啓五年(三)、この國を立退き日本へ渡る時、二歳になりし娘(四)の子を、乳母の袖にすて置きしが、その子が母は產落して當座に死す。かくいふ父は、八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の惠に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今吳將軍甘輝(五)といふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便に聞及ぶ。賴む方はこれぱかり、親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、婿の甘輝もやすやすと賴まるべし。これより道のほど百八十里、うち連れては人も怪しまん。我一人道をかへ和藤內(六)は母を具し、日本の漁船の吹流されし

(一)明朝の將軍。後、韃靼に內應し、明帝を弒した。
(二)明朝の忠臣。司馬大將軍。西曆一六七八年歿。
(三)明の熹宗の年號。(西曆一六二五年)
(四)錦祥女。甘輝の妻。
(五)明の將軍。初め韃靼に降り、後、鄭芝龍に應じた。
(六)鄭成功。國姓爺といふ。

と、頓智を以て人家に憩ひ、追ひつくべし。これよりさきは音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江、これ猩々の栖む所。風景聳えし高山は赤壁(一)とて、昔東坡(二)が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へはほどもなし。その赤壁にて待ちそろへ、萬事をしめし合はすべし。」と、方角とても白雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。

教に任せ和藤內、人家を求め忍ばんと、かひがひしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、とび越え跳越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絕えて廣々たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤內ほうと我をぬかし、「なう母ぢや人。この脛骨に覺えたり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふことか、行けば行くほど藪の中。むう、わかつたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。」と、

(一)支那湖北省武昌府嘉魚縣。
(二)宋の詩人蘇東坡。

たづきも知らぬ
ほうと我をぬかし

根笹、大竹押分け踏分け、なほ奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、喇叭、ちやるめら高音をそらし、ひやうひやうとこそ聞えけれ。「すは我々を見咎めて、敵の取卷く攻太鼓か、または狐のなす業か。」と、茫然たるそのをりふし、空凄じく風起り、砂を穿ちどうどうどう、竹葉さつと卷立て卷立て、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもおろかなり。

和藤内ちつとも臆せず、「讀めたり、讀めたり、さては異國の虎狩な。あの鐘、太鼓は勢子のもの。ここは聞ゆる千里が原、(一)虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香(二)は、孝行の德に因つて、自然と逃れし惡虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐へ渡つて力はじめ、神力ますます日本力、刃で向かふは大人氣なし。虎はおろか、象でも鬼でも一挫き。」と、尻ひつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も、畏れつべうぞ見えてける。

讀めたり讀めたり
(一)「虎嘯而谷風至。龍擧而景雲屬」（淮南子）
(二)晉の人。十四歳の時赤手で虎を搏して父の厄を救つた。

案に違はず吹く風と、共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎたて、二人を目がけ、いがみ懸るを事ともせず、弓手に撲り、馬手に受け、もぢつて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乘移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえいえい、虎の怒毛、怒聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしられ、兩方共に息つかれ、石上に突つたてば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、ふいがう吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出で、「やあやあ和藤内、神國に生まれて、神より受けし身體髮膚、畜類に出で合ひ、力立して怪我するな。日本の地は離るゝとも、神は我が身にいすゞ川、大神宮の御祓、納受などかなからんや。」と、肌の護符を渡さるれば、「げに尤も。」と押戴き虎に差向け差上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る威勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じりり、じりりと四足を縮め、恐れわなゝき岩洞に匿れ入る。

いがみ懸る
身體髮膚

尾筒をつかんで跳返し、打伏せ打伏せ、ひるむところを乘懸り、足下にしつかと踏まへしは、天の斑駒、素戔嗚尊の神力、天照神の威德ぞ有難き。

風來人

かゝるところに勢子のもの、群がり來るその中に、大將と思しきもの大音あげ、「やあ、やあ、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも、主君右將軍李踏天より、韃靼王へ獻上の爲、狩出したる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ばばぶち殺さん。しやぐわん、しやぐわん。」とわめきけり。李踏天と聞くよりも、願ふところと笑壺に入り、「やあ、餓鬼も人數、しをらしいことほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と賴む李踏天とやら、石花菜とやら、ここへ突出し詫言させい。ぢきに逢うて用もある。さもない中はいかなこと、ならぬ、ならぬ。」とねめつくる。「やあ、ものないはせそ、討取れ。」と、一度に劍をはらりと拔く。「心得たり。」と護符を虎

笑壺に入る

ほざく

いかなこと

の首にかけ、母の側に引据うれば、繫ぎし如くに働かず、「おゝ心安し。」と太刀差しかざし、群がる中へ割つて入り、八方無盡に割立て割立て、撫でまくる。

勢子の大將安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と、一文字に切りかゝる。なほも神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄し、敵に向かひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛懸る。「こはかなはじ。」と安大人、勢子のものがさいたる劍、かり鉾、數槍、手にあたるを幸に、投附け投附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劍を宙に引つくはへ引つくはへ、岩に打當て微塵になす。刃の光、玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば官人ども、色めき立つて逃惑ふ。後より和藤内、「どつこい遣らぬ。」と顯れ出で、安大人が素首をつかんで差上げ、くるくると振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

色めき立つ

二王立

(一)長崎縣北松浦郡平戸島に在る。

この勢に官人ばら、後へ戻れば惡虎の口、先へ行けば和藤内、二王立に突立つたり。「あゝ、申し御堪忍。御免。御免。」と手を合はせ、土にくひつき泣きゐたり。和藤内虎の脊を撫で、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州(一)平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮栴檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂れを治むるなり。さあ、命惜しくば身方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。」とつめかくる。「なう、なんの否でござりま

國姓爺正本挿畫

出かした

はらけ髪

せう。韃靼王に從ふも、李踏天に從ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情賴み奉る。」と、地に鼻つけて畏まる。

「おゝ出かした、出かした。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添のちひさがたなはづし、これも當座の早剃刀、母も手々に愛取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやら、こぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く間に剃りじまひ、二櫛半のはらけ髪、頭は日本、ひげは韃靼、身は唐人、互に顏を見合はせて、頭ひやつく風引いて、「くつさめ、くつさめ、むら雨、むら雨。」と、涙を流すぞ道理なる。親子どつとうち笑ひ、「そろひもそろうた供廻り、名も日本に改めて、何左衞門、何兵衞、太郎、次郎、十郎まで、面々が國どころ頭字に名のり、二行に立つてぼつたてろ。」「承り候。」と、御先手の手振の衆、ちやぐちう左衞門、東蒲塞右衞門、呂宋兵衞、東京兵衞、暹羅太郎、白城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん

五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衞門、じやが太郎兵衞、さんとめ八郎、英吉利兵衞、今參の御供先、あとに引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取る、口取る、國を取る、譽は異國本朝に、踏跨げたる鞍あぶみ、虎の脊中にうち乘つて、威勢を千里に顯せり。

——國姓爺合戰——

一六　東路の旅

東山のほとりなるすみかを出でて、逢坂の關うち過ぐるほどに、駒ひきわたる望月の頃もやうやう近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかにおとづれて、游子なほ殘月に行きけん函谷のありさま思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のほとりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心を澄まし、やまと歌を詠じておもひを述べけり。嵐の風烈しきを

(一)昔八月十五日に諸國の牧場から馬を天皇が南殿で御覽になる儀式。「紀貫之の歌に、逢坂の關の清水に影見えて、今やひくらん望月の駒」といふのがある。

(二)支那戰國時代孟嘗君の故事。「游子猶行ニ於殘月一。函谷鷄鳴」

わびつゝぞ過しける。

いにしへの藁屋の床のあたりまで

こゝろをとむるあふさかの關

關山を過ぎぬれば、打出濱、粟津原など聞けども、未だ夜の中なればさだかにも見えわかず。昔、天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都うつりありて、大津の宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えて哀なり。

さゝ波や大津の宮のあれしより
名のみ殘れる志賀のふるさと

曙の空になりて、勢多の長橋うちわたすほどに、湖遙かに現れて、かの滿誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ詠めりけん歌思ひ出でられて、漕ぎゆく舟のあとの白波、誠にはかなく心細し。

世の中を漕ぎゆく舟によそへつゝ

(一)逢坂山を越えた彼方、琵琶湖のほとりにある。今の大津市松本、馬場邊の古名。

(二)舒明天皇の二年から六年間と齊明天皇の二年から天智天皇の六年までの皇居。

(三)第三十八代天智天皇の六年から弘文天皇の元年までの皇居。

(四)萬葉集の歌人。笠朝臣麿。養老頃の人。

(五)「世の中を何にたとへんあさぼらけ、こぎゆく舟のあとの白波」。

ながめし跡をまたぞながむる

このほどをも行過ぎて、野路[一]といふ所に至りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつしか袖のしづく所せし。

篠原[二]といふ所を見れば、西、東へ遙かに長き堤あり。北には里人すみかを占め、南には池の面遠く見えわたる。向ひの汀、緑深き松のむらだち、波の色も一つになり。南山[三]の影を浸さねども、青くして滉瀁たり。洲崎ところどころに入りちがひて、葦かつみなど生ひわたれる中に、鴛鴦、鴨のうち群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔、都を立つ旅人この宿にこそ泊りけるが、今はうち過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりと覺ゆれ。

行く人もとまらぬ里となりしより
あれのみまさる野路のしの原

(一)滋賀縣栗太郡老上村。
(二)同縣野洲郡。
(三)「昆明春。昆明春。春池岸古春流新。影浸ニ南山一。青滉瀁。波沈ニ西山一。紅淵淪。」（白樂天）

行暮れぬれば、武佐[一]寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心地す。枕[二]に近き鐘の聲、曉の空におとづれて、かの遺愛寺[三]のほとりの草の庵の寢覺も、かくやありけんと哀なり。行末遠き旅の空思ひ續けられて、いといたうもの悲し。

都出でてくかもあらぬ今宵だに
かたしきわびぬとこの秋風

音に聞きし醒が井を見れば、蔭暗き木の下の岩根より流れ出づる清水、餘り涼しきまで澄みわたりて、げに身にしむ許りなり。餘熱未だつきざるほどなれば、往還の旅人多く立寄りて、涼みあへり。かの西行が、

みちのべに清水流るゝ柳かげ
しばしとてこそ立ちどまりつれ

(一)滋賀縣蒲生郡武佐村にある。今長光寺といふ。
(二)「遺愛寺ノ鐘ハ欹レ枕聽。香爐峰ノ雪撥レ簾看。」（白氏文集）
(三)支那江西省九江縣香爐峰の北。

岩清水

山川永雅筆

と詠めるも、かやうの所にや。

みちのべの木かげの清水むすぶとて
しばしすゞまぬ旅人ぞなき

柏原[一]といふ所を立ちて、美濃の國、關山にもかゝりぬ。谷川霧の底におとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、哀に心細し。越えはてぬれば不破の關屋[二]なり。萱屋の板びさし年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風。」[三]と詠ませ給へる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、鄙しき言の葉をのこさんもなかなかに覺えて、ここをば空しくうち過ぎぬ。

株瀬[四]川といふ所に泊りて、夜ふくるほどに、川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀬にうつろひて、照る月波[五]も數見ゆるばかり澄みわたれり。二千里[六]の外の故人の心遠く思ひやられて、旅の

(一)滋賀縣坂田郡。
(二)藤原良經。特に和歌に長じて、家集に月清集がある。建永元年（一八六六年）歿、年三十八。
(三)「人すまぬ不破の關屋の板びさし、あれにし後はたゞ秋の風。」（新古今集）
(四)岐阜縣安八、不破二郡を流れてゐる。
(五)「水の面に照る月なみをかぞふれば、こよひぞ秋の最中なりける。」（拾遺集、源順）
(六)「三五夜中ノ月色。二千里ノ外故人心。」（白氏文集）

思いとど抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、「花洛を出でて三日、株瀬川に宿して一宵、しばしば幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつがつ遠情を前途一千里の雲に送る。」など、或家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しも
かゝる旅寢の月を見んとは

——東關紀行——

一七　月は世々の形見

室鳩巣(一)

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋の氣色たちて、荻吹く風も身にしむ頃なり。「久しく翁のがり行かねば、このほどの老のねざめもおぼつかなし。いざ訪ね問はん。」とて、或夕暮に例の人々うち連れて來しが、「またも參らん。」とて歸らんとせしを、翁止めて、「今宵は月

(一)江戸時代中期の儒者。名は直清。江戸の人。享保十九年(一七三四)歿、年七十七。義人錄、駿臺雜話等の著がある。

もよし。薄酒進め奉らん。しひてとまり給へ。」といへば、「翁の心をいかで背くべき。さあらば。」とて、各座をしめて、清談の露やうやう繁きほどに、家人やがて心得て、取敢へぬまでにあるじまうけし、肴取添へて、盃出しけり。諸客皆醉ひて、興に入るとぞ見えし。その中に一人盃をとゞめて、「青天有(一)月來幾時。我今停盃一問之。」と、李白が詩を高らかにうち吟じけるを、また二人傍よりつけて、「人攀明月不可得。月行却與人相隨。」と歌ふ。また外の人々たがひに唱和して、その次を「皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝發。」と歌ふ。またその次を「但見宵從海上來。寧知曉向雲間沒。白兎搗藥秋復春。姮娥孤栖與誰隣。」と歌ふ。その次よりは翁も助音して、「今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人如流水。共看明月皆如此。惟願當歌對酒時。月光長照金樽裏。」と歌ひをさめけり。その後數獻に及びて、玉山倒るゝばかりに見えけり。

さて翁いふやう、『大(二)かたは月をもめでじ。』とは詠みたれども、老の

(一)詩題は「把酒問月。」

(二)「大方は月をもめでじこれぞこの、積れば人の老となるもの。」(古今集、在原業平)

玉山倒る

心も、月見るにぞ慰みはべる。されど、それにつきて、千載無窮の感も起りぬれば、うべ月を『人の老となる。』ともいふべかめり。但し、月を見るにいろいろあり。今思ひ出しはべり。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、ひとり隅に向かひてゐたりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくづくと見て、『月は徑(わたり)幾尺かあるべき。各考へて見給へ。』といふ。また同じやうの人かたへより、『あれはものの切口と見ゆ。奥へ長さいかほどかあらん。』とて、たがひに僉議しけるを、聞く人々皆舌を食ひけり。翁も幼心にをかしかりき。今思へば、世俗月を賞して光の明きを誇り、影の清きにめでて、良夜とてたゞうち寄り、もの食ひ酒飲みなどして、歌ひのゝしるを樂みとするは、かの寸尺を語るに等しかりぬべし。また騷人墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り、句毎に錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、それもたゞ景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感あることを知らぬなるべし。

一丁字

舌を食ふ

騷人墨客

翁が千載無窮の感と申すは、我がともがら古人を慕ひて、その書を讀み、その心を知りつゝ、常に世を隔てたる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照らし來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影も映るやうに覺え、月はものいはねども語るやうにも覺え、忘れては昔のことを問はまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣を棄てて、一氣に古今を洞觀して、『青天有月來幾時。』といひ出づるより、氣象の高さ、拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべきことがらにあらず。昔より李杜として、杜甫が上に稱するも、理にてこそはべれ。然れども李白が詩も古今流水の如きを感ずるまでにて、後代を待つの心は見えず。翁、昔楚辭(一)を讀みて『往者余不及、來者吾不聞。』といふに至りて、屈(二)子が心を推量りつゝ、感にたへずなん覺えし。この二句の意(こゝろ)を思ふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠に我が心を

洞觀す

(一)支那楚の屈平及びその門下後輩の辭賦を後漢の劉向が編輯したもの。
(二)名は平。支那戰國時代楚の國の人。

得たれば、あはれ一たびあうて語らんと思へども、その世に及ばねばかなはず。また末の世にさる人のありて、我と心を同じうすらんと思へど、その人を聞かねば、誰とか知らんとぞ。これひとり屈子に限らず、古今心ある際は、大方この恨なきにしもあらず。翁もこの心にて月を見ればにや、いとど感深く覺ゆるなり。元より今は末の世の昔なれば、いづれの世にか、また我が如く月に對して、今をしのぶ人もあらん。月はさこそその世をも照らすらめ。若しあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも殘さましと思ひはべり。その意を、

月みれば末の世までもしのばれて
　みぬいにしへのいとどゆかしき

ここをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ。いはれなきにはあらず。」

——駿臺雜話——

(一)江戸時代の國學者。文化八年(一八一一)、年六十六。歌苑類抄、和學大概等の外、家集として琴後集等の著がある。
(二)加藤千蔭。
(三)賀茂眞淵。

うなねつきて
このかみ
おととえ

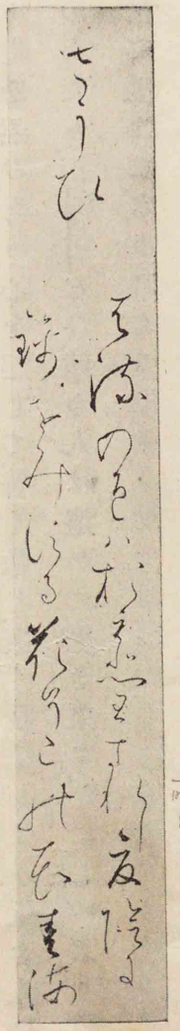
◎一八　芳宜園大人の靈を祭る

村田春海

ここに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて、芳宜園(二)の大人のおくつきの御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらをたきて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも。君は吾に十といひて一とせのこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齢におはして、吾はまだわらはにてぞはべりける。常に縣(三)居の庭にもの學びにゆきかひたる時、あしたに參るとては君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべにまかるとては君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むとては君を師ともたふとみ、歌作るとては吾をおととえのつらにぞ教へ給ひける。

世のさが
ありふる
まめごと
あだごと
はるの色は
おもひわすれし夏陰に
錦をみする
花そこの花
春海

中ごろにして君は仕の道に暇なくおはし、吾は世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕をしぞき給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては吾道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乘り、憂き事もともに憂へ、嬉しき節もともに喜びて、世にありふる業の、まめごともあだごとも、かたみに隔なく心をかはせつること、今にはたとせ。その初を繰返し數ふれば、あひ友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれ奉りて、いつの世にか相見ん、いづれの時にかことはん。常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらん。かゝるを誰かはよく堪へん。


村田春海筆蹟

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古に復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機のあやあるみやびごとを尊みいへれど、(一)くひぜを守り、舟にきだつくるともがら、かれに泥み、ここにひかれて、なほ怪しみとがむるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うずなひ、遠き人は遙かに靡き來て、いにしへぶりの歌、世に盛んになりにたるなり。

そのみづから詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりどりに備らざるはなし。その古を寫せるは藤原(三)寧樂の御世に及び、後の巧に倣へるは堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは口に盡くさゞることなく、目に觸るゝものは言の葉にのせざることなんあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざ

(一)「宋人有耕田者。田中有株。兎走觸株。折頸而死。因釋其耒而守株。冀復得兎。兎不可復得。而身爲宋國笑。」（韓非子）

(二)「楚有涉江者。其劍自舟中墜于水。遽刻其舟曰。是吾劍所從墜也。舟止。從其所刻者入水求之。舟已行矣。而劍不行。求劍若此。不亦惑乎。」（呂氏春秋）

(三)藤原宮時代。持統天皇の朱鳥八年（一三五四年）から元明天皇の和銅三年（一三七〇年）平城奠都まで凡そ十五年間。

面おこし　言あげ　價なき寶

(一)評論家。文學博士。名は雄二郎。萬延元年加賀國金澤に生まれた。宇宙。世の中。小泡十種。想痕等の著がある。

る人なし。また事好みの人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

然るを今黃金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、おほかたの世の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらん。かゝるを誰かは慕はざらん。あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天翔りても遙かに見そなはせとなん申す。

——琴後集——

一九　秋色を觀じて人事に及ぶ　その一

(一)三宅雪嶺

春花の爛漫たるは妍にして艷秋葉の霜に飽きて凋化するもまたやゝ相似、その優劣を談ずる、古よりこれあり。天智帝の春山萬花

の艶と、秋山千葉の彩と、いづれか優れると宣へるに、(一)額田女王こたへて、

(二)ふゆごもり、はるさりくれば、なかざりし、とりもきなきぬ、さかざりし、はなもさけれど、やまをしみ、いりてもとらず。くさふかみ、たをりてもみず。あきやまの、このはをみては、もみぢをばとりてぞしぬぶ。あをきをば、おきてぞなげく。そこしおもしろし、あきやまわれは。

と霜葉の二月の花に優るを陳べにき。しかも女王の擇びしところは、他の必ずしも肯せざるところ。人各、判斷を異にし、決着に到らんこと難し。今は姑くいはじ。但し春を觀るに寒風樹を吹くの時、梅花まづ蕾を破りて、清香衣袖に溢れ、これに續きて桃、續きて櫻、海棠、然る後萬花妍を競ひ、紅紫山野に滿つ。花に嫩葉の綠を添ふるあり、添へざるありと雖も、皆枝條に點綴し、瓣の軟風に吹かれて繽紛飄落

(一)第四十代。天武天皇の妃。
(二)萬葉集卷一。雜歌の部にある長歌。はるさりくる
枝條に點綴

するは、眞に優にして裏なるを示すもの。稱して美とせんか、春は卽ち艶麗とすべし。

更に秋を觀るに、秋碧空に浮かびて宇宙朗曠、滿目たゞ濃黃となり、渥丹と化し、黃なるは黃金を敷き、丹なるは錦襴を張り、壑に懸り溪にわたりて、錦障を聯ぬるの狀を現す。色彩を以てせば、遙かに春花に優るとすべく、而して丹朱爛然として野火の烘ゆるが如きは寧ろ甚しきに過ぐ。同じく稱して美とせんか、秋は卽ち宏壯とすべし。

秋の景色は實に天高く、氣淸み、草木齊しく色を變じ、野に、山に、燦爛として光彩眼を奪ふ。しかもその極るの時は、正にこれ樹葉飄零して、寂寥の觀を呈するの時、(一)歐陽修が秋聲賦にいはく、「初淅瀝以蕭颯。忽奔騰而砰湃。如波濤夜驚。風雨驟至。其觸於物也。鏦々錚々。金鐵皆鳴。又如赴敵之兵。銜枚疾走。不聞號令。但聞人馬行聲。」と。その秋聲とは

宇宙朗曠
渥丹

(一)宋の人。字は永叔。唐宋八大家の一。
淅瀝

慘憺慄烈

(一)「おくれなば梅も櫻におとるなん、魁けてこそ色も香もあれ。」(殉難錄稿、河上正義)

繡を纂め錦を綴る

即ち凋槁せる樹葉の、亙に接觸し、若しくは飄零して窓を撲ち、地に墜つるを指せるもの。その一望丹黄華麗をつくせるところは、かくして搖落し慘憺慄烈たらんとす。

古來人の春花を引きて譬喩するもの多し。梅花の寒を凌ぎ、雪を冒し、玉肌芳香を放ちて而して散去る。所謂魁けてこそ色も香もあれといふの類なり。されど秋葉の丹化し、繡を纂め、錦を綴り、瓊璨として目を眩まし、然る後飄零して擧げて一空に歸するも、また頗る見るべからずとせず。これを人事に喩ふる、少壯事を起し、險を冒し、一敗して命を殞す。悲慘悽愴、人をして哀を催さしむれども、年既に老い、經歷あり、功勞ある身にして、なほ發憤事を擧げ、運命に安んじて從容生を授くるは、他の感を惹くの一層深きことあり。敦盛の一ノ谷に陣歿せる、今に及びてなほ人の說くところ。須磨の邊に種々の遺物あり。或は敦盛蕎麥などいふもあり。遺物の僞造なるはいふ

までもなけれど、附近の地に名勝古蹟の人言に上る、能くこれが右に出づるあらず。しかもこれたゞ事情の哀なるが爲にして、恰も春花の早く香を放ち、軟風に飄落すると同じ。齋藤實盛齡七十、鬢髮を黑くして戰場に臨み、軍利あらずして餘衆皆退散せるに、乃ち單身留り戰ひ、「我が頭を斬り木曾公に獻ぜよ。」と呼ばはりて死したる如き、はたまた三浦義明の九十に垂んとして賴朝の擧兵を援け、戰敗れて賴朝の死を聞き、その子に語りていふ、「公は一敗を以て死するものならず、汝等必ず索めて隨へ。我は年老いて行く能はず、留りてここに死せん。」と、遂に命を敵刃に殞し、ししが如き、一種限りなき悽愴の感を人に與ふ。年老いてその終りを潔くするは、普通の事情の哀を催さしむると異なり、秋葉の爛然として萬丈の錦を織り、而して秋風に搖落するの形あり。

禽鳥の死に臨みて美音を發するあると同じく、人もまた老後に

(一)武將。武藏の人。最初源義朝に從ひ後平氏に屬した。平維盛が越前に義仲を伐つ時これに從つて戰死した。

(二)源義仲。

(三)平高望五代の裔。畠山重忠と衣笠城に戰つて陣歿した。年八十九。

驕倨放肆

耳順

鵬搏萬里

奮躍して死を妙にするあり。清盛の位人臣を極め、驕倨放肆憚ることなき、誰とてこれを憎く感ぜざるはなしと雖も、その病みて將に死せんとし、「吾死するの後は必ず佛に供へ經を唱ふること勿れ。ただ願はくは賴朝の頭を斬りて墓前にかけよ。」といへる、幾分の同情を惹くに足るなり。賴朝は業遂げ、志成り、手に兵馬の權を握りて永久の基を立てしかど、臨終の際に特に見るべきなく、或は兇手に斃れたりとさへ傳へらる。彼資性善く忍び、喜怒色に現れず、深く謀り遠く慮り、坐ながら天下を制御するに至れる、以て器度の一世に超卓せしを見るに足ると雖も、天眞を發露して人心に愉快を感ぜしむるに至りては、却つてこれを清盛に看ること多し。秀吉既に天下を一統し、齡また耳順に及び、乃ち鵬搏萬里、師を朝鮮に出し、進みて明に入らんとし、陣營に勞する約七年。前には必勝の算を立て一々皆中りしに、ここに於て計るところ數、齟齬し、竟に何の得るところ

慎計密謀

(一)或人が家康の性質を評して「鳴かぬなら鳴くまで待たう子規。」といつた。

危道を踏む

(二)上杉景勝。

(三)石田三成。秀吉薨後、上杉景勝と謀つて家康を倒さうとした。

(四)慶長十九年(一二一七四年)及び元和元年(一二一七五年)の兩度、豐臣氏の舊臣が秀賴を擁して德川氏に抗した戰役。

安を貪る

なくして終りたるが、その豪邁雄略、人心を發動するの大なるは、即ちここに存す。これまた終りを壯にせるものといはざるべからず。家康は慎計密謀、所謂子規に對し鳴くまで待たんとせしもの。勝利を萬全に期し、敢て危道を踏むが如きことなく、隨ひて大慘事なく、大快事なしと雖も、上杉氏東に起りて檄を傳ふる、直ちに赴きてこれを伐ち、而して石田等以て計策のあたれりとし、虛に乘じて大軍を西に集むるや、遽かに軍を旋して關ヶ原に會戰し、みづから馬を躍らして諸軍を指揮したるは、戰略の見るに足るなきにせよ、意氣の頗る壯なるを見るべし。後十餘年を經て、歳既に七十を超え、會〻大阪の役あり。前後二役ともに大軍を督してこれに臨み、遂に覇業を定めたる、老いて益〻壯にして、徒に安を貪らざるを知るべく、その行爲の人に愉快を覺えしめざるに拘らず、なほ當時に傑出したるの疑はれざる所以なり。

二〇　秋色を觀じて人事に及ぶ　その二

西郷隆盛功成り名遂げて故山に歸臥し、然る後壯丁を提げて三[一]太郎を越え、九州を震動せしめしが、この如きは理の見るべきなく、若し養成せし健兒の、既に事を發してまた制する能はず、己ひとり生くべからずとしてこれに一命を授けたりとする、餘りに力なきに過ぎたり。將力能くこれを制するに堪へしも、實に自らこれを牽ゐて政府を覆し、以て大いに志を逞しくせんとする、卽ち餘りに無謀に過ぎたり。いづれより見るも稱するに足らずと雖も、しかも老西郷の一生は、卽ちこの戰爭を以て、更に一段の生氣を添ふるあり。その可愛[二]の嶽に籠守し、四面遁るゝに地なかりし時、部下數百を將ゐて奮鬪圍を脫し、故山に還り笑を含みて死したる、殆ど終りを詩的にせるなり。何の爲に起りて何の爲に戰ひたるか、意志判然たら

歸臥
(一)熊本縣葦北郡。肥後より薩摩に入る國道に當る三個の峠、津奈木太郎、赤佐敷太郎、松太郎をいふ。

(二)宮崎縣臼杵郡北川東海の二村の間にある峻嶺。

ざれども、その判然たらざるところ、却りて豪傑の豪傑たるところを表す。若し彼をして非命に死するなく、徐に天命を終へしめたらんには、位は、元勳の首座を占め、聲望當代に並びなかりしならんも、そのいづれが生涯の豪壯ならしめたるかは、いはずして知らる。

孔明[一]年二十七、出でて三分の計を畫し、奇策縱橫、謀るところ成り、成るところ功ありしが、しかも皆策士流の事、當時策に於てこれに匹儔すべきものその人に乏しからず。而して多く稱するに足らず。たゞそれ窮時に方りて顧託を受け、遺孤[二]を擁して艱險に當る。誠意忠節、少しも權を挾み私を營むの跡なく、成敗利鈍逆め料り難く、鞠躬盡力死して後已まんを期し、出でては將、入りては相、病を力めて大事を處し、遂に陣中に終りしが、群雄の中に特出し、人臣たるものの儀表となれる實にここに於てし、彼はこれを以て殆ど聖の域に到り、三代荒唐[三]の時代と雖も、能く及ぶ鮮し。[四]成吉斯汗[五]幹難河畔に起

非命に死す
(一)諸葛亮の字。今の支那山東省の人。蜀の劉備を輔けて天下に霸を唱へた。建興十二年（西暦二三四年）五十四で陣歿した。

策士
(二)蜀王劉備の遺子劉禪。

(三)夏、殷、周の三代。

荒唐
(四)元の太祖。名は鐵木眞。帝位に卽いて成吉斯汗と號した。（西暦一一六二年―一二二七年）

(五)Onon.
外蒙古。黑龍江の上流。

朽ちたるを摧き枯れたるを拉ぐ

(一)甘肅省。
(二)阿骨打(オクダ)の滿洲に立てた王國。十世百二十年間。
(三)陝西省、華陰縣の東。
(四)今の河南省汝陽道。
(五)唐を距る西へ凡そ百四十里。
(六)今の河南省開封府。
(七)Chathamの政治家。英國の少ピットの父なる老ピット。チャタム伯と稱する。(西暦一七〇八年—一七七八年)

りて四方を經略し、雄師向かふところ朽ちたるを摧き、枯れたるを拉ぐが如く、西亞を蕩定して東歐を侵占す。然るもその累りに領土を拓けるは、恰も蠻酋の暴力を振ひて止るを知らざるの觀あれど、還りて六盤山(一)に到り、病みて死せんとする、左右に語りていふ、「金(二)の精兵潼關(三)に在り。南は連山に據り、北は大河を限る。以て遽かに破り難し。道を宋に假るに如くはなし。宋と金とは世讐、必ず能く我に許さん。卽ち兵を唐鄧(四)(五)に下し、直ちに汴京(六)を撞け。汴急ならば必ず兵を潼關に徵さん。而して數萬の衆を以て千里赴き援はば、人馬疲弊し到ると雖も戰ふ能はず。これを破らんこと必せり。」と。その敵を料り、勢を察する、實に掌を指すが如く、眞に智略の遠く人に超えたるを見る。

チャタム(七)は一代の偉績、英國の威名をして隆々世界の表に耀揚せしめ、世に第一流の政治家を以て目せらる。しかもその大なるの

誅求

(一)Richmond.

(二)Philip Sidney. 英國の貴族。文武に通じ一代に才名があつた。(西暦一五五七年—一五八六年)
(三)Elizabeth. 英國の女皇。(在位西暦一五五八年—一六〇三年)
眷顧

感ぜらるゝはここに在らず。既に官を罷めて後、英政府の米洲植民地に苛政を施きて誅求到らざるなきを攻擊し、以て雙者の間を善くするに努め、而して一旦米の佛と勢を聯ねて逆ひ抗し、而してリッチモンド(一)が戰爭を不利として講和を主張するに及び、飜然前說を棄て、病を扶けて議院に臨み絶叫すらく、「ブルボンの前には決して膝を屈すべからず。飽くまで戰爭を繼續して、最後の勝を占めざるべからず。」と、氣昂り、胸塞がり、その場に卒倒し、舁がれて家に歸り、遂に瞑したる、これ誠に七十年の生涯を振はしむるに足れり。フィリップ・シドニー(二)はエリザベス女王(三)の眷顧を被り、名を當代に騁せにき。しかも後人の感歎して措かざるは、特にその臨終の光輝を放てるに於てす。英軍に將としてオランダを援けスペインと戰ふや、飛丸に腿を貫かれて倒れ、流血淋漓、渴を覺ゆる頻りなり。從者百方捜索して僅かに一杯の水を得、捧げてその前に至る。傍に一兵卒の

傷つき倒るゝあり、氣息奄々、從者の盃を捧ぐるを凝視して、心に大いに羨むものの如し。シドニー盃を口にせんとして偶、これを看、即ちいふ、「彼のこれを要する、吾よりも多からん。」と。盃を垂死の傷兵に與へたり。これ後人の、今に及びてなほ嘖々として稱するところ。若し彼が最期に於てこの事なかりしならんには、シドニーの名は、或は忘れられたるやも知るべからず。しかも年壯なるシドニーの光輝ある最期や、寧ろ爛漫たる春花の風に散ると狀を一にし、麗は則ちこれありと雖も、未だ壯とすべきに至らず。これに反し、前に列記せる數者の齡傾きてなほ志せるところに淬勵奔勞し、斃れて而して後に已みしは、以て麗とすべからずと雖も、壯は則ち餘りあり。

淬勵奔勞

人の世に處する、事を遂げ、功を奏せるもの何ぞ限らん。身を顯榮の地に陞ぜしもの、また甚だ多し。然るも而して後十年、二十年、若しくは三十年の餘命を保ちながら、却りて一事の成るなく、一功の擧るなく、たゞ碌々無爲、食ひて臥し、覺めて食ふこと犬豚と擇ぶなく、爲に前年の功績を忘れられ、甚だしきは死生の分明ならざるあり。彰著なる功を樹てて、幾何ならざるに世を捐つるか、然らずんば、老に及びて掉尾の飛躍を演ずるか、いづれかその一に出づるに非ずば、以て英雄の面目を完うし、盛名を久しきに傳ふる能はず。即ち春の景色となるか、秋の景色となるか、必ず花々しき最期を遂げ、以て一生を艶麗若しくは宏壯ならしむるを要すべし。但し秋に入りて草木多く色を變じ、光彩燦爛一時の壯觀を盡くし、然る後飄零凋殘し去るとはいへ、これ等多くの草木を外にして、更に松柏の凋むに後るゝあり。固より萬木悉く然りとし、一を以てすべてを律すべきにあらず。かの松柏の屬、四時を貫きて綠を變へず、目を眩するの紅彩、人を悅ばすの麗色を缺き、一歳の間特に觀て賞美する時なしと雖も、その蒼幹數十丈、亭々として空を凌ぎ、天に參り、枝條は四方に

犬豚と擇ぶなし

掉尾の飛躍

張りて蓋の如く、蒼鬱として烟霧を罩め、隆冬を經、霜雪を冒し、長へに靑を更めざる、實に變化の外に出づるものといふべし。これあるかこれあるかこれまた窮せずんばあるべからず。

——想痕——

二一　日本文學研究の新意義

藤村作

(一)文學博士・東京帝國大學教授・福岡縣柳河の人。上方文學と江戸文學・國學・國文學史等の著がある。序說等

我々日本國民にとつて生命の糧であり、力であるものは國文學である。取出しても盡くることなく、一時代から次の時代へと絕えず我々の內的生活に糧を供してくれる寶庫は、我が二千年來の國文學である。我々は國文學を知り、國文學に親しむことに由つて、常に日本國民たる生命を新たにしてゆくことが出來る。眞の日本國民として反省と自覺との機會を與へられてゐる。我々は生まれて日本民族である、日本國民である。何としても他の民族ではあり得ない、また他の國民ではあり得ない。それは偶然に日本といふ國土に生まれたが爲ではない。日本民族の血を引き、日本國民の生命を生命として享けてゐるからである。血は爭ふべからざるものである。血に由つてなされてゐる國民の結合は無機的結合ではない。有機的結合に成れる國家は機械的な國家ではない。爭ふべからざる血は特殊なる民族性を作り、民族精神を作り、この民族性、民族精神が有形にまた無形に國家を形成してゐる。我々は日本民族として生くる外に生くべき道は見出し得ない。而して國家に由つて民族共有の生命の實現に力め、民族精神を世界に擴充するを圖ることが、我々の個人としてまた國民として生くべき唯一の道である。

無機的
有機的

國民の文學は國民の精神をさながらに寫した鏡である。かるが故にイギリス文學は英國民に取つて最も尊い文學である。フランス文學は佛國民に取つて最も大切な文學である。ドイツ文學は獨

國民に取つて最も愛すべき文學である。我々日本國民にとつては、日本文學の外に世界の何處にもより以上に尊い大切な愛すべき文學はあり得ない。我々は自己の生命を他人のに比較して、これを評價するやうな自己に冷酷な所爲はしたくない。我が國民精神の表現である國文學を外國文學に比較はしても、その價値の比較には及びたくない。よしそれが高く評價されようと、國文學は我々日本國民の爲には唯一のものであり、如何ともし難いものである。

我々はその本質を究め、益、これを充實せしめ展開せしめることに努めればよい、またそれより外になすべき道はもたない。我々は我々に生命の力を與へてくれる二千年來の歌人、物語作者、隨筆日記、軍記物の筆者から、近世の各種樣式の文藝の作家たちに心からなる尊敬を捧げたい。そしてそれと同時に、古典文學の筆寫、蒐集、整理、訓點、註釋、批評の業に從事して、我々に古典文學に親しみ得べき

便宜を與へてくれた國文學者たちにも同樣の敬意を保ちたい。

文學に國境はないやうにいふ人もある。ある程度までは承認さるべきことである。然しまた一面からいへば、民族的、國民的の血の鮮かなものは文學である。國語は國民の中にその職能を全うするばかりでなく、その國語を解するものには、外國人も同樣に、その職能を盡くし得るとはいへど、單語文章のもつ意味はとにかく、その中に脈打つてゐる全精神を些かの遺漏なく理解し得るものは、その國民を措いては決してあり得ない。かるが故にイギリス文學は英國民をして研究せしめ、フランス文學は佛國民をして研究せしめ、ドイツ文學は獨國民をして研究せしむるが最も適當であることに論はないが、民族關係の複雜であり、國際交渉の古來久しく、國語組織の甚だ相似た西洋諸國民の間に於ては、外國人で他國文學を研究することも妨ないかも知れない。然し、我々のやうに特殊な

民族性を有し、特殊な國家を有し、世界の國際關係から久しく隔絶されて、特殊な生活を營んで來た國民の文學系統を異にした特別な組織をもつてゐる國語に表された文學は、特に國民的の色の鮮かなものであることは言ふまでもない。隨つて我が國文學の研究は、ひとり我々日本國民のみなし得べき業ではあるまいか。

我が國民の過去を振返つて見ると、亞細亞大陸地方から支那や印度の先進文化を、初めて我が國に輸入したのは甚だ遠い昔のことである。その時代に於ては我が國民はまだ素樸の狀態に在つたから、彼の國の文化の燦爛たる光輝に接しては驚異から羨望、崇拜の心を向けて、盛んにこれを輸入し模倣した。內なるものを省て、よくこれを育みそだてるに遑なく彼に學ぶことに務めた。制度に於て、服飾、家屋に於て、藝術に於て、彼の影響感化を受けた點は甚だ多かつた。學問、思想、文學に至るまで追隨と模擬とに力を致してゐた。

これが爲に當時の文化は國民の獨創力の甚しく缺乏したものとなつてゐた。かくして國家を支配した政治の實權は、貴族階級へ移りゆき、王朝時代、武家時代と變りいつたが、外國崇拜の精神は絶えず續き、拜外の迷夢は依然として國民の間に覺めなかつた。

偶、江戸時代に至りて、德川幕府は外國交通の道を杜絶したけれども、多年彼の感化を受けてゐた國民は、相變らず拜外の夢に酣醉を貪つてゐたが、その時代の精神の中からゆくりなく復古の唱道の聲が聞え出した。「古に復れ」といふ聲は天籟の如く國民の耳朶に響いて來た。復古の精神は昔の儘の社會を再びこの地上に現さうとする精神ではない。古代の素樸な精神の中に人間の眞精神を見出し、日本人の眞の相を見出して、それに復らうとする精神である。長い年月の間に知らず識らず人間性の眞から離れて來てゐる生活を、自覺的に本來の人間性にひき直さうとする精神である。外國、

提唱

他民族の感化影響の爲に晦まされた民族特有の精神の發揮に返らうとする精神である。古に復れといふのは、人間本然の性に復れ、民族本然の相に復れといふのである。賀茂眞淵は人間の眞の精神を萬葉に見出して、萬葉の研究、萬葉の和歌を提唱し實行した。本居宣長は日本人の眞の相を古事記に見出して、古事記傳の著述にその生涯の大部分を捧げたのである。

これ等先學の提唱や實行に由つて、拜外の迷夢は一部破れかけたのであつたが、江戸末期に至つて、外國の要求に迫られて已むを得ず、當局は鎖國の制を撤廢して、ここに西洋諸國との交通が開かれた。ここに於て、西洋文化を我が國民の眼から覆うてゐた幕は切つて落されて、我が國民は再び外國文化の光に眩惑されてしまつた。國際的の地位を高め、國力を增進して、彼等と世界に對立するには、先づ彼等の所有するものを我に得なければならぬと知つた敏捷な、我が國民は、一千餘年前の國民がなしたと同じやうに、外國文化の輸入模倣に努力した。さうして今日に於ては最早その點では多く彼に劣るところなきまでに漕ぎつけたのである。拜外の精神は對象を異にして盛んに動き始めた。かくて夢から夢へと移り乘つて、今なほこの夢を續けてゐる。この夢の中に明治も大正も過ぎて、昭和の御代となつた。

世界大戰爭はいろいろの意味で世界の劃期的大事件であつた。この事件に覺醒され刺激されて起つた改造の機運は、今や世界に充滿して各方面の改造今現にその途上に在ると見ゆるのである。西洋文化の眞相がこの大事件に由つて遺憾なく暴露されて、これに對する批判の眼が冷やかに輝き始めた。そして明らかにその弱點を認識するに至つたのである。それと共にこれまで多く閑却されてゐた東方文化が、世界の注視の的とならうとしてゐる。物質的

から精神的へ、分析的から綜合的へと學界の推移しゆかうとする傾向が見え出して來た。數年前から西洋學者の東洋研究、日本研究に向かふ傾向はこれを語る事實である。

今や世界國際の關係、國民の交渉は實に近く且つ密である。一隅を叩けば他の隅々へ直ちに響を傳へる。我が國に於ても時を同じうして、各種改造運動と共に古典復興國文學研究の風潮が何處からともなく起つて來た。拜外の迷夢は先づ若い人たちの中から覺めかけて來た。老年たちが無自覺に拜外の鈍い空氣の中に逡巡して、舊習舊慣の保守に腐心してゐる中に、却つて若い人たちの中に自覺的な活動、思索がいろいろと起りかけてゐる。改造の聲の中に、外國の束縛を脱して、自國の生命を擴充してゆかうとする聲が聞かれる。この強い精神は、老人たちの中でなくて若い人たちの中に聞かれるやうになつた。新忠君論、新愛國論運動は若い人たちを中心として起つたものではあるまいか。自國を凝視し、日本國民自身の眞の相を見出さうとしてゐる熱意は、確かに若い人たちの中に動き始めたものである。この熱意は、少數專門學者の提唱宣傳に基づく一時的の現象ではあるまい。それは若うして西洋文化の研究に功を積んだ人たちの間に、かゝる機運の動いてゐる事實に徵しても知ることが出來ると思ふ。

この機運は、これを一言に纏めれば復古精神の勃興である。「古に復れ」「日本國民のその元に復れ」「外國精神の束縛を脱せよ」といふ精神である。荷田春滿や賀茂眞淵が二百年前に唱へ出して、本居宣長や平田篤胤等に繼承されて、大いに國民を警醒し、明治維新の大業を成就した根本を培養した精神と同樣の精神である。それが今こゝにまた繰返されてゐるものといへる。江戸時代の復古主義者には、世界知識の狹かつた爲に、固陋な偏見に囚へられた弊があつた。

今日の復古精神にはこの如きものを含んではならない。

復古精神は舊い昔の社會や生活をさながらに今日に移さうといふのではない。古代生活や古代文化の中に見出される人間の眞の精神、日本國民の眞の相に復歸しようとする精神であらねばならない。因襲の世界から本然の世界へ、いびつの世界から正しき世界へ、虚僞の世界から眞實の世界へ、歸らうとする精神であらねばならない。而してかゝる人間の眞の精神、日本國民の眞の相は、これを古典文學の世界に見出すべく、本然の世界、正しき世界、眞實の世界はこれを文學の中に見出すべきであるから、復古精神には古典への憧憬、國文學探究の精神の伴ふを常とするのである。

かやうに復古精神の勃興、古典復興の新現象に促されて、國文學の眞の光が次第に世に出でつつあるの事實を見るのではあるが、なほ我々學徒の爲に遺された未開墾の荒蕪地も少くないし、新考察、新研究に遺された餘地は極めて多いのである。ひとり學者研究の餘地が多く遺されてゐるばかりでなく、民衆理解には更に多くの餘地の存することを思ふのである。專門學者の努力はその方に向かつても前途遼遠の感を免れないのである。――日本文學講座――

二二　日本文學

優美閑雅な日本語を使つて平和柔順な國民が歌つた歌、それには長歌も短歌もあるが、これ等の歌が日本文學の基礎といつてよろしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべて自然の譬喩に寄せられてゐることが、早く後世の文學の特質を示してゐる。古事記、日本紀の歌、萬葉の歌などは卽ちそれ等の國民歌の幾分かを傳へたもので、推古以來支那の文明が傳はつて、だんだんと漢文漢詩が用ひられるやうになつても、日本固有な歌は、それとは別途に發達

した。殊に上代からの神祇を祭る詞、祝詞の形式を應用して、寧ろ漢詩に對抗して、特殊な國民思想を歌つたのが、柿本人麿、山部赤人等の先輩歌人で、續いて奈良時代の大伴家持等である。萬葉集には漢文渡來以前の歌も多く載せてあるが、かういふ新進歌人等の歌も多い。優美典雅といふ點に於て、忠君愛國の思想に於て、よく日本國民の上代思想を表したものである。

奈良時代に出來た萬葉集は漢字を以て記された。漢字の音訓を用ひて、日本語を記したものである。平安時代になつて百年の後には、假名の發達があつて、平假名で自由自在に國語を記すことになつた。ここに於て、假名文の發達が著しくなつた。萬葉の後をついで、古今集以下の勅撰和歌集が出來たのみでなく、竹取物語、伊勢物語を物語の祖として、數多の假名物語、日記、隨筆の類が現れた。就中有名なのは紫式部の源氏物語と、清少納言の枕草子とで、漢學の素が

その文藻を助けたことは、見逃されぬことであるが、上古以來行はれた和歌の風流情味が、常にこれ等の文學の背景となり、基礎となつてゐるのも、爭はれぬ事實である。大鏡や、榮華物語などいふ史實を記した物語も、つまりはその材料を一轉化したものである。奈良時代の和歌卽ち抒情詩が、平安時代には物語卽ち敍事詩と發達したのである。

鎌倉幕府の創立と共に、時代は一變した。隨つて文學も一變した。源平二氏の爭が材料に採られた保元物語や、平治物語や、源平盛衰記などといふ軍記物語が、佛家の諸行無常、愛別離苦の思想の下に筆記された。降つて吉野朝廷の頃の太平記も、同じく軍記物語である。平安時代の盛時とはその材料に於てこそ、それぞれ差別はあれ、敍事詩たることは同樣である。材料の變化と共に言語も變化して、漢語及び漢文脈の加つて來たことは、自らその內容と外形との調

和を保たしめてゐる。徒然草、方丈記なども、佛教の盛んなこの時代の著名な産物として數へられる。

足利將軍の世は、概して戰亂時代で、無學の世と稱せられてゐるが、明朝との交通も繁く、繪畫を初め美術工藝の進歩も著しく、鎌倉の末からの進歩を承けて、將軍義滿の頃に至つて、能の發達大成を見るに至つたのは、大いに注意すべきことである。平安、鎌倉二時代を通じての敍事詩は、ここに至つて劇詩の形をなしたのである。能は幕政時代を通じて衰へず、今日にも傳はつてなほ盛んであるのを見ても、如何にその我が國民の嗜好に投じたものであるかがわかる。その材料としては、上代の萬葉集から、中古の古今集、伊勢物語、源氏物語等は勿論、平家物語、源平盛衰記、また義經記、曾我物語などの軍記物語に及んで居り、また世話材料も入れてある。歌ふ方からいつても、音樂の方からいつても、舞の方からいつても、出來るだけ

當時の粹を拔いたもので、寧ろその精華を集めたものといつてもよい。あらゆる藝術の方面を集大成したものとして、當時の武士の修養に資したことは多大であつた。

德川時代に至つては學問の復興から、漢學が更に唐宋時代の精華を學んだのは勿論、儒學に於ては、支那に於ても稀なほどな大儒が輩出した。また國學の研究も盛んになつて、久しく忘れられてゐた平安時代以前に遡つて、萬葉集も研究され、源氏物語も研究された。印刷の方法が進んで、古書の飜刻が盛んになつて、庶民皆太平の世を樂しんで、靜かに文學を翫味する餘裕を得た。漢學、國學の勃興につれて、專ら平民社會に行はれた所謂俗文學が發達した。淨瑠璃や、小說や、俳句や、狂歌や、川柳やが、和漢古今の文學に根ざして、新しい國民思想の花を咲かせた。昌平時代の樂天洒落な氣風と、義理人情に勇み立つ犧牲的精神とが、これ等の各種の文學の上に溢れて

ゐる。綱吉將軍の元祿時代と家齊將軍の文化文政時代とが、その最大繁盛な時世であつた。淨瑠璃の近松門左衞門、俳句の芭蕉は元祿の世に屬し、小說の曲亭馬琴は文化文政の世に屬する。その他の作家は數限りもない。平民社會の嗜好に投じようとした爲、中には材料思想に鄙陋なものの少くないのは遺憾である。演劇の發達の著しかつたことも、注意すべき事柄である。かやうに平民文學の發達したのは、一面に於て平民社會の勃興を意味するので、日本の國民が東洋の諸國中、明治大正の御代を待つて大いに世界に活躍するといふ氣運が、既にその上に示されてゐるやうに感じられる。

維新以後の進步は、ひたすら西洋文學の新味を加へたことで、東西文明の融和は、我が國文學の上に於ても、いち早く認められるのである。最初は平易な英文の小說、詩歌の飜譯から始つて、次第に佛、獨、露、瑞諸國の文學を咀嚼するに至り、歐米の新思潮は抒情詩、劇詩

の各方面にわたつて、常に新しい傾向生命を我が文學の上に及しつゝあるのである。上古以來の國文學の研究も益盛んになつて、一層根柢あり、權威あり、價値ある文學の興るのは、近き將來に期待さるべきことである。但し新奇を競ふの餘り、往々我が國體と相容れず、我が國民性と扞格する思想の輸入されることもあるので、その間の調節は大いに考慮しなければならぬのである。

改新帝國讀本 卷九終

昭和四年九月二十三日印刷
昭和四年九月二十五日發行
昭和五年二月五日訂正再版印刷
昭和五年二月八日訂正再版發行

編者 芳賀矢一
訂補者 上田萬年
同 長谷川福平
發行者 東京市神田區通神保町九番地 合資會社 冨山房
代表者 坂本嘉治馬

改新帝國讀本 奥附

定價	
卷一、二	各金四拾五錢
卷三、四	各金四拾參錢
卷五、六	各金四拾壹錢
卷七、八	各金四拾壹錢
卷九	金參拾五錢
卷十	金參拾參錢

昭和五年度臨時定價	
卷一、二	各金七拾參錢
卷三、四	各金七拾錢
卷五、六	各金六拾七錢
卷七、八	各金六拾七錢
卷九	金五拾七錢
卷十	金五拾四錢

發行所 東京市神田區通神保町九番地 合資會社 冨山房
電話九段一九二一—一九二五番
振替口座東京五〇一番

印刷所 冨山房印刷部

昭和五年度臨時定價 五拾五錢
野本製

Mr. Josine Kato
Very thank you
Good-bye